風月寶鑑

曹雪芹 著
高鶚 續

本間文庫
文庫 14
D154

怨玉集

コラオルラ

てゝに蒐めたるひと卷は、われはかた舒情の詠なり、吾れ等が過ぎし短き生涯のうち、あるは造化のいみじき力にれどろきあるは万象の限りなき變化に懷ひをはせたるもの即ちこれなり、かりに人生をながき樂譜にたとはゞ、吾れ等はろのひとふしを歌ひしに過ぎず、必しも音調の人をうごかすものあるにあらず、よし、みだれしふしならんとも、たゞ響きだにふかゝらば以て足れりとせん、あゝ藝術の園にはたえず異香の人をとゞめしむるものあり「吾れ等のろの園に逢することの尚遠きみちにさまよふをや

雨しめやかなる根岸の草廬にて

山本露葉

風月万象

麥笛　　兜三花坪

柳影集　　山田枯禪

蔦蔦の葉蔭　　山本露葉

東洋文化研究所圖書

來
雷
兒
足
祀
外

For one fair Vision ever fled
  Down the waste waters day and night,
And still follow'd where she led
  In hope to gain upon her flight.
Her face was evermore unseen,
  And fixt upon the far sea-line;
But each man murmured, "O my Queen,
  I follow till I make the mine."

—Tennyson: The voyage.

文庫14
D154

笛麥

鶏の歌
荊
森のさすらひ
居牛場
蛇
猫を捨つる哀歌
翁の悔悟
巨鐘
野犬
墳墓を撫して
憐ふる鼠に
蛇のつぶやき
別離

兒玉花外

柳影集

藝船
杜陵八景
十字架
硯賦
河水
別離
都を出つる歌
卒業生に寄する歌

山田枯柳

菊苗の葉かげ

ふだうの葉かげ
流星
吹笛餘韻
蟹が子に寄するの樂歌
哀歌
元旦の歌
玉椿
夢
友に別るゝとて、
夕つゝ、
荒磯
あるさき
鶏の歌
慰籍

山本露葉

麥笛

雞の歌

革命をうれ雞（にはとり）の
聲になぞらへ歌はん乎
眠むる天地を一聲に
のぞけく高く呼びさまし
力はにたり光なき
死せる此世に聲揚げて

生命をよばふ人のごと
暗きねぐらに獨りさめ
光を慕ふ眼のさまは
自由の燭を手にとつて
闇世を照らす人のごと
いぶせく狹きねぐらより
闇を破りて鳴く聲は
世を導かん英雄の
あぐるに似たり呱々の聲
空にきらめく星の色
地には勇みの雞の聲

やがて其の星消えゆかば
黎明うまる雲裂けて
朝暾東に輝きて
人のつくりし冠の
脆きにもにぬ紅の
冠に照るあさぼらけ
小だかき丘にかけのぼり
力をこめし羽たゝきに
いまはと高く鳴き渡る
麥の優にけだかしや
野に出て餌をあさる時
毒の利鎌の首たてゝ

ひろむ螟もかひなけん
纖弱き草に威をふるふ
阜螽の騒ぐをかしさや
義人一たび世に出でゝ
風にも堪えぬ民草を
蹂り枯らすする奸物の
影をかくすに似たる哉

矛の形の黄距もて
敵に向へるさまみれば
革命軍の兵士の
血を見でやまぬ如くにて
神の稜威を剣にぬり
不義を斃すが如くにて

海き羽がひのろがなかに
ひとしく雛をへだてなく
守りろだつる愛情の
火炎もゆると誰か知る

睦しいかな牝雞に
心くばれるふりをみよ
餌を與ふる優しさは
鳥と鳥との戀なれや

僞善の白衣身にまとひ
媚ぶる鸚鵡の舌なくも
人をいましむ言あり

籠にありての靜けさは
民の頭に暴虐の
斧振り上げし帝王が
臂をとらへて牢獄に
埋められたる人のごと
餌ふりまきし人の手の
嘴に觸れて悲鳴して
眼に落つるろのさまは
民權自由を唱へたる
涙と血との大丈夫が
絞殺臺の朝露の
光と倶に消ゆるごと

今われ歌をうたふ身は
わやめもわかぬ闇の世に
自由の光輝きて
天地に充つる歡喜の
聲涌く日をば待ちかねて
雞と共音に歌ふかな

燕

我家の軒に二羽來て
巣ひし去年のつばくらめ
秋たちかへる其時は
來りし時に數まして

かなたに立てる青柳の
枝にならびて羽繕ひ
いと忙しく見ゐにしが
幾海山を越ゐぬべき
羽翼も共に整ひて
諸聲高く勇ましく
木の葉のごとく飛び去りぬ

年はまたもやかへり來て
柳の糸は若みどり
燕もこゝに歸り來ぬ
ともなふ數も唯ふたつ
去年のかへりにひきかへて

やよ、つばくらめ事問はん
春に生れて春に死し
うき秋しらぬ汝が身にも
海山隔つ別離あり
共に悲しき思ひあり
清き心をはのみせて
胸にいくろの悲みを
つゝむや、哀れつばくらめ
輕き汝の翼にも
重きいくろの愁ひをば
もてるや、哀れつばくらめ

否々われは慮るまじ
淺き心の一すぢに

悲しきわれの心もて
汝が身をわれは慮るまじ

あゝつばくらめ〳〵
汝は天使の姿して
神の命令を傳へ來る
汝は平和の春の魂
汝は樂しき愛の聲
雲に聳ゆる高殿に
假の住居をもとめずに
荒野の末の賤が家に
いとも佗しき巣を作り
花の都もすさびたる
淋しき鄙もへだてなく

春を告げくる優しさよ

あゝつばくらめ〳〵
去年の別れにひきかへて
樂しく汝を迎へまし
我家に愛をもちきたす
汝を樂しく迎へまし

森のさすらひ

眼うるみて頬さへも
血の氣さめたる人の子よ
力もなげにしをれては
あまりに弱し若人よ

雪にも耐ふる常盤木の
われの緑にあやかれよ

軍ごとしてうなゐ等が
遊びし岡に銀杏葉の
黄金のごとく降りしきて
名利に奔る今の世の
痴人の夢や示すらん

空に群れゆく渡り鳥
おちつく杜はいづこぞや
苛政に堪えぬ國民の
あだに墳墓の地をすて、
自由の里をめざしつ、

急ぐに似たり旅の道

殘紅、色にひかりなく
姿哀れの楓葉よ

歡樂、時は短かくて
權威の光はかなくも
消えてむなしき虐王の
臺榭の跡に似たるかな

木の實の甘き盃の
かゝれる枝にうちつどひ
小鳥は歌ふ樂しげに
神に感謝を捧げつゝ

細き烟の料にとて
柴を拾へる賤の女は
喜びいろに溢れつゝ

木の間にみゆる茅の屋は
其の日〳〵のなりはひに
冬構へする暇もなし

一むら白く輝きて
尾花は風になびきつゝ
王者の銀の盾のごと

あれし葎のうが中に
名もなき花の黄に咲きて

優しきふりのゆかしさよ
葉の散りはてし木のむれは
人馬痩せたる荒村の
都に遠く立つがごと

衣は薄きうなゐ子が
袂を滿たすさまゞの
木の實はマナか古き代の

雲に聳ゆる松の樹の
緣の兒いかめしく
蔦にまかれて立つさまは
蛇の智慧もつ俗衆の
毒手のからみ忍びつゝ

義人世にある如くなり

明日は霜にて凋むとも
今日のはゐにと復り咲く
花に貴きさとしあり

西に東に吹く風の
調べに鳴りてまろびゆく
木の葉は似たり輕薄の
才子の世をば渡るごと

朽木を出でゝまたもとの
くちきに歸る虫みれば
罪に生れて罪に死す

人の上こそ思はるれ

枯れたる草と朽ちし葉に
見ゐざる春の光あり
生るゝ春の豫言あり

小鳥の胸をさわがせて
高き梢に鳴く百舌の
聲は血に飽く爲政家の
餌を求むる聲に似て

霜に枯れたる叢に
かすかに殘る虫の音は
榮華の末の亡國の

歌をも聽くが思ひあり
時雨と風のねものもて
秋の軍の寄するとて
山の姿は變らじな

澄めるは何の鏡ぞや
もの〻屍を載せ去りて
生命に運び行く水よ

憂にとぢし我胸に
希望の波の湧きよせて
「愛」と「平和」の明星の
清き光を眺めつるかな

屠牛場

甘き平和の實をねんと
身は鵜にあらねども
泣きて歌ひて路を行く
旅の淋しき夕まぐれ

足をとゞめてうち見れば
こゝは慘たる屠牛場の
坂は悲しき死の路か

草は綠に茂れども
飢ゑたる牛も食みもせず

いと逞しき牛さへも
一ふるひして行き過ぐる
骨あらはなる痩牛の
非運を叫びゆくもあり

流血痕を留めたる
斷頭臺のうが上を
過ぐる鳥にも似たるかな
翼疲れて重くとも
あたりの枝にれりもせず
悲鳴を落しゆく鳥の

追はれて坂を登るとき
牛は怖れに進みわず

哀れや人の慾望の
火炎燃えたつ其の鞭の
痛みにいとゞ堪へかねて
羊のごとく力なく
命をあとに進むなり

輓くは何ぞや箱車
箱の中にはれのが骨
おのが肉をも引き裂かん
兇器を載せて登るなり
かへりは人の手に輓かれ
屍は同じろの箱に

嗚呼ほこれる者よいつまでか

「時」は汝をゆるすべき
迷の道を立ちいでゝ
眞の道にかへれかし
死の鞭來り醒すとき
戰慄くとても甲斐やある
罪を載せ行く末つひは
地獄に陷る命運の
悲しからずや人々よ

蛇

虛樂の花の盛りなる
夢の巷に大蛇の
姿をみする見世物や

虎狼のごとき眼せる
男は立ちて客を呼ぶ
舌には燃ゆる强慾の
から紅の火を吐きて

春の雪もて粧へる
露にも似たるいたはしき
鳩の翼を右手にもち
「見よやひと〳〵一呑に
鳩のむ蛇のさまを見よ」
うち振りながら叫べるは
惡魔の法を說くがごと
左手閃めく電光の

悲鳴あぐるもなか〳〵に
あまり優しき鳩の身は
さながら石に異ならず
うちに悲しき響ある

甘美の肉に肥ゑ太る
蛇は榮華の草に寢ね
毒を蓄ふるが腹に
孱弱き鳩の血は流る

泣きて世にある人々よ
蛇は貴族にあらざるか
鳩は民にはあらざるか

彼惡むべき漢ころ
あゝ爲政家にあらざるか

猫を捨つる哀歌

月の光にながむれば
消えてゆくへや水泡の
しばし命の玉の緒を
つなぐもはかなる欄干に

身にあまりある病の
朝な夕なの苦痛を
流るゝ水に葬らん
せめて御空の月をみよ

痩せさらばひし汝が身は
つれなき人の心根の
棘の笘に追はれしも
今日を限りの惱みなる

情の花の散りはてゝ
木枯すさぶ人の世の
空しき春になかんより
木の葉と共に流れゆけ

何を慕ふか悲しげに
かすかにもるゝ糸の音や
わなゝきふるふ汝が足は

なほも憂世の戀しくて
悲しき我の心もて
汝をはかるとな恨みそよ
果敢なき智慧にさろはるゝ
ゆくへいかにと思ひそよ

柳の枝に蜘蛛の
糸に縋れるふりをみよ
愁を歌にうたひづる
虫の聲をも聞けよかし

生としいけるものみなに
いづれ免れぬ運命あり

後れ先だついろ〳〵の
花に嵐のためしあり

啼きて生るゝ緑兒や
泣きて世をふるわび人や
榮華の露に醉ふ人も
いづれか泣き行かざらん

あゝ味氣なき世の中に
何しに汝はおひのびて
つれなき人の香をもかぎ
罪をかさんと思へるや

我も此世にうまれ來て

世の道寒き霜をふみ
憂身の上に霰ふる
人に恨みの襲ね着に
罪を重ぬる苦しさよ

朝な夕なに死の鞭の
われを導びく山や川
神の園の生を追はれつゝ
我はさまよふ小羊の

泣きて別れのつらくとも
泣くが浮世の常にかも
汝は救ひの水をえよ
我はすがらん神の袖

月の光はさゞ〳〵て
岸の枯葉のはら〳〵と
結べば消ゆる水泡と
さゞめきながら流れ行く

翁の悔悟

薄紅に桃の花
岸邊に匂ふのどかなる
春の眞晝に牛牽きて
流れにいろぐ翁あり
寄る年波は無慈悲なる

心の影をかはばせに
とゞめて凄く眼には
慾の火花のきらめける

弱者虐ぐ手を伸べて
牛に觸るゝや疾風の
體の内に火を揚げて
何の怨みか苛酷なる
翁をあげて地に投げぬ

時に破れたる衣着たる
少女は花を手にもちて
歌ひながらに過ぎりしが
まのあたりなる悲しさに

叫びつ村にかけ入りて
救ひを呼ばふ人々に

よし醜類の身なりとて
憤怒をこめし力には
權威振ふも何かせん
富の力の敵しねん

日頃非道の地主とて
人は翁を憎めども
耕す夫、織る妻も
鋤すて梭すて時すて、
來り翁をたすけたり

無事を祝ぐ聲の裡
翁は村に送られぬ
正義の劍手に把りし
凱旋兵の歸るごと

少女が父の住ふなる
伏屋の前に來しときに
翁は仆れまろびいり
涙溢れてふし沈む

ま白き雪の消えあへぬ
重き頭をうち擡げ
翁は涙拂ひつゝ
「朝な夕なに今日までは

富の寶玉にあてがれて
無明の闇に迷ひしが
少女の切なる導きに
生命の途に立出でぬ
慾の錠もて鎖されし
心の窓は愛らしき
指もていまは開かれぬ
自ら縛る猜疑の
繩は嬉しや解かれたり
生別死別手に握り
數多の人を苦しめて
日々に積みたる罪業の
塔の高さの危うさよ
自ら墓を掘らねども

人を埋めしくやしさよ
軒の雀の價もて
人を買ひたるうたてさよ
鎭守の神の前にたち
鳥は塒に人々の
あがめたふとむ雲近き
一もと杉の古木さへ
人を頤使する鞭揮ひ
移さば移し得らるべし
されど瞬く一髮に
閃き來る死の光
あゝ人間の避けがんや
憂ひの思たゞまなく
惡魔の如き眼して

空と土とをながめつゝ
人と家とをにらみつゝ
歩みしたびに樹の蔭に
小さき眼あつまりて
恨みの征矢を放ちしが
ろの疵いとゞ痛かりき
人はうべなり畜類の
にくしみ受くもことわりや
人にはあらぬ鬼の身の
苛責の石はのがれて
邪智に悶ゆる蛇の身の
情けの袖に包まれし
嬉しさ何に譬ふべき
天津日影は罪人の

衣を照し騒しき
胸に静かに入る息に
温き光をなげたまふ
今より心改めて
毒を盛りたる手をもちて
畠に水を灌ぐごとく
情けの水をろゝぐべし
ゆるしたまへやひとゞよ

聽く村人も言ふ人も
涙もよほす春雨や
花咲き鳥は歌へども
ながめ淋しき村落に
平和の花のさきみだれ

行く水やまん時あるも
甘露の蜜のながれ〳〵ん

巨鐘

鐵工場の片隅の
暗黑に據りて巖のごと
塵にまみるゝ巨鐘や

小器器々鳴りさわぐ
中に潛みて言はず
黃蜂うなる音もなく
光はあらず鉛だに

一たび明にあらはるや
俗衆眼ろばだてゝ
試みにあぐ一聲に
雲の帳にふるひあり

靜にれこる清風に
塵はあとなく消えうする
神より惡魔遁るごと
獅子に百獸隱るごと

木の葉に露のしげくして
芳香蝶と飛ぶところ
初めてのぼる鐘樓や
先づ地の上に則布きて

山河の靈も命をきく

朝(あした)自由の大空に
鳥をば放ち夕には
安き塒に歸らしめ
花には聲のうちしめり
星に歡喜の永久(とこしへ)の聲

悲喜哀樂を司どる
嗚呼偉(たぐひ)なる力かな
耳傾けて人は泣き
人は勇みて血汐わく
世のわづらひに疲れたる

人を眠に導けど
毒藥やゝにまわるごと
極惡人の胸を刺す

烈しくゆるく世をさとし
望を與ふ福音や
平和(はて)あまねく天のごと
極(はて)より極に響くかな

野犬

人の力の弱き時
天より來る革命の
聲に應じて勇ましき

荒野の犬を呼び立てん
角笛一聲獵犬の
葦に谷に岩こゐて
歸り來れるうがごとく
聞けや自由の笛の聲
紅燈光かすかにて
惡魔の躍り舞ふところ
世の細民を苦しめん
毒盛る人の影に吠ゐ
天の靈火を啄みて
罪の巣へる家を焚く

火を喰ふ鳥のわざなくも
不義焼き拂ふ星をよべ
哀れ蠶の命をとり
あたら少女の血をすひし
綺羅着飾れる貴人の
醜を包める衣を裂け
人の涙をあつめたる
露にたわめる醜草の
榮華をさろふ權門に
尾を掉る犬を殪せかし
花を生命の蝶々や

弱き兎を追ふなかれ
牙をたのめる猪や
狐狸をかりたてよ

腐れし魚の腸の
市に臭ひて堆たかく
群犬狂ひ噪ぐとも
よろめく足をひく勿れ
渇かば川の水を飲め

涙を人に見せじとて
餘憤を糸の音にこめて
門邊に歌ふわび人の
生命の絃をたつなかれ

打てど叩けど涙なき
人形に慕ひあこがるゝ
女の胸を亂すなよ

過ぎし浮世の奪闘に
身は破れたる落武者の
宇宙は山川の美はしく
昔ながらの春なるも
見渡すかぎり薄原
風のうよぎに魂を消す
悲哀の人に吠えたつる
犬の急所の咽喉をかめ

冷たき床に横はり
飢ゑて凍ゑて石のごと
果敢なき夢や綻びん
乞兒の孤に觸るゝなよ

嗚呼恐るべき疫癘が
何の報か平等の
劍揮ひて寄する時
幸福に誇れる富豪の
震ひ慄くろが如く
貴人の夢を醒せかし

爭ひ犯す戲れの
罪惡の業火の底深く

破滅に終る危さを
告げよ知らせよ世の人に

人の手をもてよられたる
非運の繩に縛らるゝ
人を自由に解けよかし
酷熱動く鐵槌と
黑く光れる情なき
釘と木とにて造られし
人を惱ます首枷を
鋭き齒もて碎けかし

實を吠ゆるのゆゑをもて
虐手の棒に斃るとも

聲をつゞけよ其聲の
代々に傳はり響して
不義の亡ぶる曉や來ん

墳墓を撫して

我身一つをたもちかね
定めなき世の面影を
見せて漂ふ浮雲の
空を眺めつさまよへば
いつしか來る薄原
山の裾より吹き來る
風に悲しき調べあり
盡きせぬ長き響あり

墳墓を撫して

茂れる薄かきわけて
辿れば路に墳墓の
一つ淋しく立てりける
痩せたる手をば差伸べて
撫づれば怪し我胸に
無限の思わき來る

「やよ墳墓よ汝はしも
胸に文字をば刻まれて
闇と光のうが間に
何時の世よりか佇める
我は此世に生れ出で
早くも闇に立迷ひ
虚にはむせび風に泣き

人の心の情なくて
涙にもろき男子とは
いつしか我はなりにけり
春夏秋やはた冬の
四時の景色を夢とみて
東の空にあかゝと
昇る朝日の光より
夕の影を喜びて
草葉の上にれく露の
うすき光を眞とし
人の心の闇路をば
辿りて年を經たりけり
此世は闇かさりながら
神より受けし己が身の

我は涙を揮ひつゝ
なほも闇路を辿らなん
躓く石のあらばあれ
陷る谷のあらばあれ
汝の立てる下こゝは
我の行くべき所なれ
永久の平和のある所
生命の泉湧く所
愛と自由の住む所
輝く光明見る所
我が持物と誇りたる
わづかの智慧と力をも
人を恨むる心をも
惡魔の前にぬかづきて

あけくれ日ごと罪犯す
弱き小さき心をも
穢き土に投げ棄てゝ
汝の下に入るまでは
我い忍びて水銀の
杯とても飲みもせん
氷の及受けもせん
朝な夕なに泣きもせん
やよ、墳墓よ〳〵
人には見ねば我胸に
深く刻られし文字を見よ
未だめぐる血のゆるやかに
響く太鼓の春の海
憂世の風を知らざりし

焚せしが如き我胸に
刻られ初めにし文字を見よ
「苦痛」と深く刻まれし
動きて止まぬ文字を見よ
然れどもつらき此文字も
汝の下に行かん時
夢の如くに消ゑ失せて
「平和」の文字の現はれん
あゝ、墳墓よ〳〵
堅く冷く醜しき
汝に言葉あらねども
親しく我に語りたり
眞實を我に語りたり
僞善の赤き狐火の

闇路に迷ふ旅人を
嫌し惑はす今の世に
汝に逢ふの嬉しさよ
聞けや此世の夕暮を
告ぐる野寺の鐘の聲
見よや塒にかへりゆく
翼重げの群鴉

いざ我とても歸らなん
草踏み分けて歸らなん
悲しくつらくある時は
またも汝を尋ね來ん」

名殘惜くも立あがり
途を急げばさは〳〵と

薄吹きまく夜嵐の
陰府に誘ふ聲すごし

憐れなる鼠に

泣きて幸あるものならば
つぶるゝまでも泣けよかし
運命は狹き金網に
鼠は狂ひもがけども
哀れなるかな渾身の
力をこめし働きに
鐵碎きうるとても
汝に悲き死の門の

鍵を盜みてもつ人の
心根いかで裂きうべき

人の嵐に敢へなくも
あだに散るべき花ならば
今ぞ情なき鐵に
恨みのいきをかけよかし
世に疎まるゝ囚人の
檻に血を吐き倒るごと

醜き汝がはらからの
生命の露をなめんとて
貧しき人のパンゆゑに
罪の闇路に入るごとく

闇にひうかに來るとき
匂をはなて屍の

義人一たび血を流し
罪に亡ぶる人の子の
救の道に入るごとく
よしや冷たき醜類の
水と鹽との血なりとも
人の詭計の術に落ち
死の味なめんはらからの
免るゝ智慧の香をろゝげ

陰府の響の工場に
あたら少女が朝夕に

母となるべき血と肉を
涙にかへて織りなせし
綺羅や錦を着かざれる
虚飾虚榮の貴人は
白晝にも不義の網を張り
富の小鳥を捕へずや
貧しき人や乞食らの
遺骸は犬の屍と
土にまみれて並ぶとも
卑しき物と顧みず
荆棘と石とにくまれたる
牢獄の裡に人々の
叫べる聲の聞かずや

死の穴みゆる悲しさに
狂ひ戰慄くわざなるも
鐵やぶる歯のあらば
榮華にあまる金銀の
器具をなぞて粉にせざる
日影さへぎる高殿の
礎石なぞて碎かざる
されども奈何、運命の
車はあとにかへしえん
あゝ憐れなる鑛夫が
暗黑と毒氣と戰ひて
命の軍破るゝ時
光明仰ぎて微笑むがごと

安けくあれと思へども
光は汝のものならじ
小さき胸に溢れくる
悲痛こゝに盡きずとも
憂ふるなかれ永久の
火にて燒かるゝ恐れなければ

蛇のつぶやき

幾代經にけん石垣の
小暗き中に身を忍び
毒の劍を磨きつゝ
やむよしもなき蛇の身は

流れにのぞみ首たてゝ
醜き姿うつしつゝ
炎燃えたつ紅の
舌ひやしゝもいくたびか
水面に浮ぶ月影の
くしき光に誘はれて
迷ひ出でにしはらからの
電と消ゑたる果敢なさや
夜な〳〵光る星の眼の
われ射るさまの怖ろしや
頭を垂れて草のごと
蚯蚓のごとく這ひしかな

岸邊に咲ける草花の
色にあこがれ香に醉ひて
まどろむ間なく妄執の
來る羽音の騷がしや

冷たき人の屍に
力をこめてまつはれば
めぐる血潮の音なくて
長き黑髪亂れけり

我巢の上に立つ家の
笑ひつ泣きつ怒りつゝ
蜜を爭ふ蜂のごと

あゝ人間のかしましや
節おもしろくうかるなる
蛙呑めども食へども
我に歌なく快樂なし
あまれる智慧に悶ゆのみ

朝な夕なに流れくる
芥は何の果ならん
匂ひもあらず艶もなく
怨みもあらず思なし

追ひつれはれつ娛しげの
魚族は何の屑ならん
白き花咲く萍は

何の妖怪のわざならん
ろれ尾をあげて水うては
嫉の玉の音となり
人琴抱きてかなづれば
戀の炎の響あり
眼はかたくとぢらるも
糸をば焼かんわが怨怒
天の聖火の落ち來り
我身を灰となすまでは
世の罪惡を司どる
魔王の腕にからまりて

力試めさんよしもなく
唯いたづらに狂ふのみ
人の誇れる顔に
怖れ疑ひ悲みの
かげの動けるあやしさや
胸の機械のうごきては
希望の手にて植ゑられし
木には花さき實れども
落ちて空しく腐れては
木蔭に人や悲まん
執着の火の燃ゆ來ては

地に腹つけてもがけども
虚空を人は仰ぎつゝ
嘆きの息を雲に吐く

小さき露と草の實に
小さき虫に涙なし
塵に砂に沫にさへ
たゞ人の眼に涙あり

天の實藏の一つだに
地の持ちわざる憫れさよ
人の榮華の裝ひは
われの鱗の一つだに

醉ふては欄に凭る人よ
此世の荒き壺をなめ
濁れる酒をはすよりも
天の葡萄の露を吸へ

内にむかへる歯にかゝり
誰か免るゝ術かある
されど恨みに軋るれば
溶けん碎けん鳴りもすれ

眞白き人の掌に
利慾の蜘蛛の網はりて
一たび觸ればものみなな
蝴蝶となすの魔力あり

人のくねれる腸は
日に幾廻り〳〵
沸にては臭き毒汁の
通ふ管にはあらざるか

われ四肢なきも自在なり
くび振りたてゝ進みなば
草は威風に靡き伏し
虫は忽ち迷ふめり

冬の安けき眠には
食をもとむる憂ひなし
雪に凍ゐて飢に啼く

鳥は梢に人の子は
憎惡の棘のたてられし
人を顧はすわが眼より
誰か棘をば拔きくれん
ぬくに其手のいたければ

風雨の足や走る雲
あゝ死の神の鞭とるか
生としいけるものみなを
載する車のとゞろける

あまたの人にみとられて
咽喉燬きつき舌はつり

罪の百鬼に責められて
人よ淋しく我は死す

光にうとく闇になれ
人をば厭ひ厭はれて
活きん、車のすゝみ來て
裂けし軀を運ばるゝまで

別離

兄

永き別としるからに
しばし涙をぬぐへかし
薄紅の唇を

吹く春風にふるはせよ

弟

東の空を眺むれば
花の都の道しるし
松もかすみて見わかぬ
君ゆく方と思ふから

兄

今一たびは弟よ
榮の花さける高き家を
うるみがちなる眼とて
瞳子こらしてながめみよ

弟

わりし我家を草とせば
かしこの家は杉の森
忍び〳〵てみつむれば
またも涙に見ゐわかず
悲しや父は畦道に
はかなく消ゆし陽炎の

兄

母も悲や背戸口の
椿の露と散りにしを
かしこの家に恨みあり
泣かじとすれど我胸に
沸ゆし血潮のわきかへる

弟

巣をとられたる子雀の
親失ひし雛鳥の
別るもつらし西東
低き我家の軒みるも
高き彼家の恨めしき

兄

橋の袂をすかしみよ
旅する人のためにとて
人の情にほられたる
立石の字は異なれど
二人が胸に刻まれし

「恨」の文字に差ある

弟

夜の間にふる春雨に
ぬれてもたぐる土筆
人に摘れてしをるとも
血にてしるせし此文字の
いつかは消ねんこの恨み

兄

何時までいへば繰言の
糸のもつれのとかるべき
のどけく永き春の日に
いかに心をつくすとて

いざこれよりは別るべし
脚絆の紐をしめよかし

弟

行かんとすれば君が眼に
浮ぶ情の白露や
眉にひろめる糸虫の
悶轉ゆ愁をいかにせん

兄

ありし我家を見返れど
門に緑の二本の
松は果敢なき父母の
立ちたまふごと思はれて

待ちたまふごと思はれて

弟

かなたの岡に蓬摘み
こなたの川に魚あさり
山ふところに椎拾ひ
冬は圃に大根引

兄

裏に接ぎたる柿の木の
實のなるはてや如何ならん
根を分ちたる菊苗の
生さきいとゞ思はるゝ

弟

君は東へ旅衣
我は西へと行くかたは
連ちかき都とや
兄上幸くあませかし
また逢ふ時のうれしさに

兄

荻の若葉の早くより
浮世の風を知りそめて
荒野の末の虎杖の
酸き世の味をなめんとて
獨り淋しき汝が身を
鎮守の神に祈るかな

弟　去年の踊のにぎはひに
團扇にかける月の夜に
君が噂はたつ鳥の
村より村をわたりにき

兄　嶺の櫻のちり〳〵に
思ひ亂るゝ汝が心
甲斐なきことを嘆くより
燒野に生ふる早蕨の
萠ゆる力をれもへかし

弟　怪しや君がかはばせの
はのかにあかし夕燒の
いざや袂を分つべし
日もはや西に入相の
鐘もかすかに聞ゆれば

兄　舞ふてたのしき蝶〳〵よ
一つの花に口つけて
吸ひし薫りを四つの袖
濡れし袂にふきかけよ

弟

橋の下ゆくせゝらぎの
春をば送る樂の音を
別離の歌と聽かばやな

兄　いつ逢ふことゝ定めねば
けふの命の琴の音に
うれひを捨てゝ合はさばや

弟　海山里を越ゐぬべき
羽翼のはしゝ燕の
曠野よこぎる白鳩の
矢の翅ころ戀しけれ

遠く隔つときくからに

兄　幾山河をへだつとて
心の道に境なし
晝の疲れに叶はずも
夢路をかよへ夜な〳〵は

弟　梢に蟬のなく時も
笹葉に雪のつもる日も
心一つにいろしまん
憂ふるなかれ兄上よ

兄　汝に贈らん滝公英の
都になれぬ花のふり

弟　君に捧げんわが家の
紋にも似たる花すみれ

兄　共に望を萠の木の
香抱きてかへるまで
また蹈まんとは思はじな
渡りなれたる石の橋

弟　彼家にまさる家たて、
雲もやぞらん二本の
千歳の松を植うるまで

兄　よひの宿は程遠し
三ツ四ツ五ツ坂こねば
か弱き足のねばつかな
朧に月も出でたれば

柳影集

山田花柳

柳影集

葦船

山田枯柳

たけき陽神の心には
なぞて陰神のならるべき
いとし子すてし葦船の
行くへを看め伊奘冊の
尊は磯に泣き伏しぬ

限りもしらぬ大海の
波を枕の旅衣
吹くしほ風にさらしつゝ
いく夜すごすか葦船の
行くにまかせる蛭兒神

「あゝ行ける哉わが蛭兒
再び歸ることなかれ
汝がろの足のたゝんまで
あゝ行ける哉わが蛭兒
潮の中に入るなかれ
われらは汝をすてしとて
あゝ行ける哉わが蛭兒

海の極の島國に
なが身を寄せよやすらかに」

日神のもてる瓊矛の
光にまさる日のひかり
遠きうなばらてらしつゝ
瑞穂の地に風なぎて
あゝ葦船の行けるかな

「天の浮橋わが身には
憂ひにいたる道ぞかし
高間の原の神集ひ
樂しかりける昔をも
なげく甲斐なき我身かな

碧の駅盧島にすまひして
八尋の殿のあさ夕の
樂しかりしは少時にて
天の柱ゆるぐまで
悲しき涙れつるかな」

折りしも起る風の音
嘯く波にゆられつゝ
あはれ葦船流れ行く
海の極の島國に
あはれ葦船流れ行く

杜陵八景

夕風さむき高樓に
空ゆく雲を看むれど
夢路のあとの懷かしく
今の愁にたへかねて

身をうちよする欄干の
花の惠みの露やこれ
寶の玉のもりが岡
昔ゆかしき舟橋の

八つの景色の浮彫も
世になき人を忍はむと
なげきのうちの業なるに
尙せくりくる我が涙

酒に愁を忘れむと
うち傾くる盃の
數もつもりてうき酒の
香に酔へはわがこゝろ

わかき生命にたちかへり
昔を見する幻に
優しき姿あらはれて
我は光にてらされぬ

帶葡の眼花の唇
翠の袖に紅の帶
すゝしちゞれし前髪や

笑へゝいづる片えくぼ

玉の皮膚をなよやかに
柱によせて立つ時は
岸の柳の春風に
吹かれてなびく姿あり

思ひなやみて文机に
身をうち伏せはたくれ毛の
みだるゝ様は秋風に
野邊の薄のうよぐごと

花のいきふけば
春風のべを渡るごと

わが身の心やいらぎて
香はたかし春の花

葡萄の眼つゆれべば
秋雨軒につたふごと
心のわくもしづみゆき
愁はふかし秋の草

たかき調のオルガンに
合せて歌ふ乙女子の
節うるはしき讃美歌の
中にまじれる君が聲

あたり靜けき金曜の

祈禱の會に身をふして
罪うちわぶる神の前
殊にやさしたる君が姿

われろの聲を聞くときn
塵のこの世をうちわすれ
われろの姿を見るときは
罪のこの身をなげくなり

何ぞ怨みて叢雲の
月をかくせる土曜日の
集會をはりて歸り行く
香ゆかしき君が袖

七日のうちの安息日と
神の定めし日曜の
午前のいのりの集會に
わさてうるはし君が髪

われらの袖の香をかげば
若き血汐のわきかへり
われらの髪の色みれば
若き生命にかへるなり

嗚呼ある時は箱根路の
緑の雲を分けて行きて
草の湖水の岸に立ち
名もなき鳥の音をきゝぬ

嗚呼ある時は東路の
確氷の山にわけのぼり
涼風かよふ高樓に
この世の夏を忘れにき

君が姿をうつしたる
湖水の水のさちはき
あだ浪よせてわが胸の
絶えぬかわきに注げかし

吾妻はやとこひなきし
尊のこゝろわが身には
いとゞ悲く忍ばれて

恨はふかし輕井澤

悲しいかなやうま酒の
香の醉はしばしにて
さめてうれたき幻の
影に殘れるわが身かな

酒よりまさる汝が愛の
泉はかれてエンゲデの
コペルの花は色もなし
何を望みのわが身ぞや

月影清く欄干の
八の景色を夢のごと

淡くてらせばわがこゝろ
千筋の絲と亂れつゝ

都の住居うちすてゝ
心にまかす獨旅

いく山河をへめぐりて
岩手の關につきにけり

わが高樓の八景は
すきにし昔文政に
藩公に歌や詩筆にして
さゝげしものとかや

今は時世も變りきて
不來方城の八景は

世の文明にともなはれ
さま新にぞ見ねにける

心の宿の不來方よ
コペルの花の香をしたふ
わが身にゆるせ我が涙
汝が八景に注かなむ

悲しいかなや不來方の
園生の櫻ちりにけり
風は梢に吹きあれて
盛りの夢の跡もなし

散るぞ果敢なき夢見草

また來ん春をたのみてか
青葉しげりて春の暮
悲しきうちに望あり

はかなくなりし君が身は
さかで散りにし櫻花
時の使のめぐりきて
園生に櫻雲を起すとも

嗚呼いつ歸りこむ我が君よ
花に嵐と詩人は
つれなき風をうらめども
更にうらめし死出の山

春は花さき花ちりて
愁はふかしさくら山
花の雪吹に降りかへて
静にふくる夜の雨

病の床にうちふして
日にはろりゆく君が身を
いたみて泣きし折々は
悲しかりけり夜の雨

はかなきものと思ふ身に
ゆかりも深き櫻山
散るを惜みて春雨の
ふるはわが身の涙かな

八幡の山の秋の月
世々をてらしてかはりなく
さやけき光今もなほ
鳥井のほとり照すなり

嗚呼この光一度は
黒髪ながき彼の君の
影をうつして地にまで
香うつしゝともあり

嗚呼この光一度は
笑顔やさしき彼の君の
面をてらして石にまで

戀を敎へしともあり

今は悲しき八幡山
烏井のしめのしめやかに
光ふけゆく月見れば
すぎし昔を懷ふかな

悲しいかなや黑がねの
橋にかゞやく夕日かげ
西に沈まむ影みれば
はかなき君を思ふかな

悲しいかなや本誓寺
音あはれなる入相の

鐘きくときは我がこゝろ
世の常なきを恨むなり

悲しいかなや名須川の
小田の田の面の雁みれば
翼にろひてわれもまた
慕ひ行かまし君があと

北上川のはし近く
千舟は歸り船人は
うち喜びていさましく
うたふ船歌こゑたかし

われは果敢なき一葉舟

荒きこの世の大波にたゝよはされて舵をたゐ
行へもしらぬ濤の上

一葉の舟のわが身には
君が胸こゝろ埠なれ
君いまさねばわが舟は
いづこのはてに流るらむ

一葉の船のわが身には
こひしき君は舵なれや
君いまさねばわが舟を
行らんたよりもなかりけり

一葉の舟のわが身には

戀しき君は順風なり
君いまさねばわが舟を
行らんたすけもなかりけり

悲しいかなやから衣
きた上川の船人の
歸帆をみれどよるべなき
身の果敢なさを思ふかな

冬は淋しき岩手山
ふりつむ雪の夕間暮
われたゝずみて看むれば
風いとさむし暮の空

岩手の山にふりつもる
雪はわが身の愁かな
つもりし量の多しとて
われの愁にこゆべしや

岩手の山にふりつもる
雪はわが身のなげきかな
春の光にてらされて
流れ出づれば泪川

人に知られし不來方の
世にうるはしき八景も
闇にまよへるわが身には
悲しき樣に見ゆるかな

心の宿の不來方よ
ながうるはしき景を見て
あつき涙にむせぶなる
われを咎むることなかれ

十字架

本篇は、我が正教會の主教ニコライ氏の德を贊したる者なり。予多年同主教の舘内に住み、朝夕其溫容に接し、懇篤なる教訓を受く、予や不幸幼にして父母を失ひしも、今や同主教を見ると、宛も我が父母に異からず。夫れ本篇の如きは、只同主教の片影をうつせしのみ。予が主教に對する感情及び同主教の事業に就きては、他日一大篇什を出さんとす。

一

吹く風あつき夏のうち
むらがり起る夕雲の
あはひにきらめく電雷の
四方に轟き走るごと

シナイの山の神の聲
若き神僕の胸ろこに
ひゞき渡りて身にくだる
神の使命を悟り得つ

月ほろなる春の夜
波しづかなる大海の
底に流るゝやはじはの

わきかへりつゝ行くごとく

ナザレの主の御言葉の
深きこゝろを身にしめて
道をつたへん心根は
せきとむべくもなかりけり

心おごれる悪魔はひき
わかき神僕の髪をひき
心けがれし悪魔はうち
わかき神僕の肩をうち

「あゝ行き玉ふことなかれ
才すぐれたる身を持ちて

なぜ愚なる傳道の
むなしきわざに果つべきぞ

「わゝ行き玉ふことなかれ
萬卷の書を讀み破り
名譽の源の湖の
智識の水にあきねかし

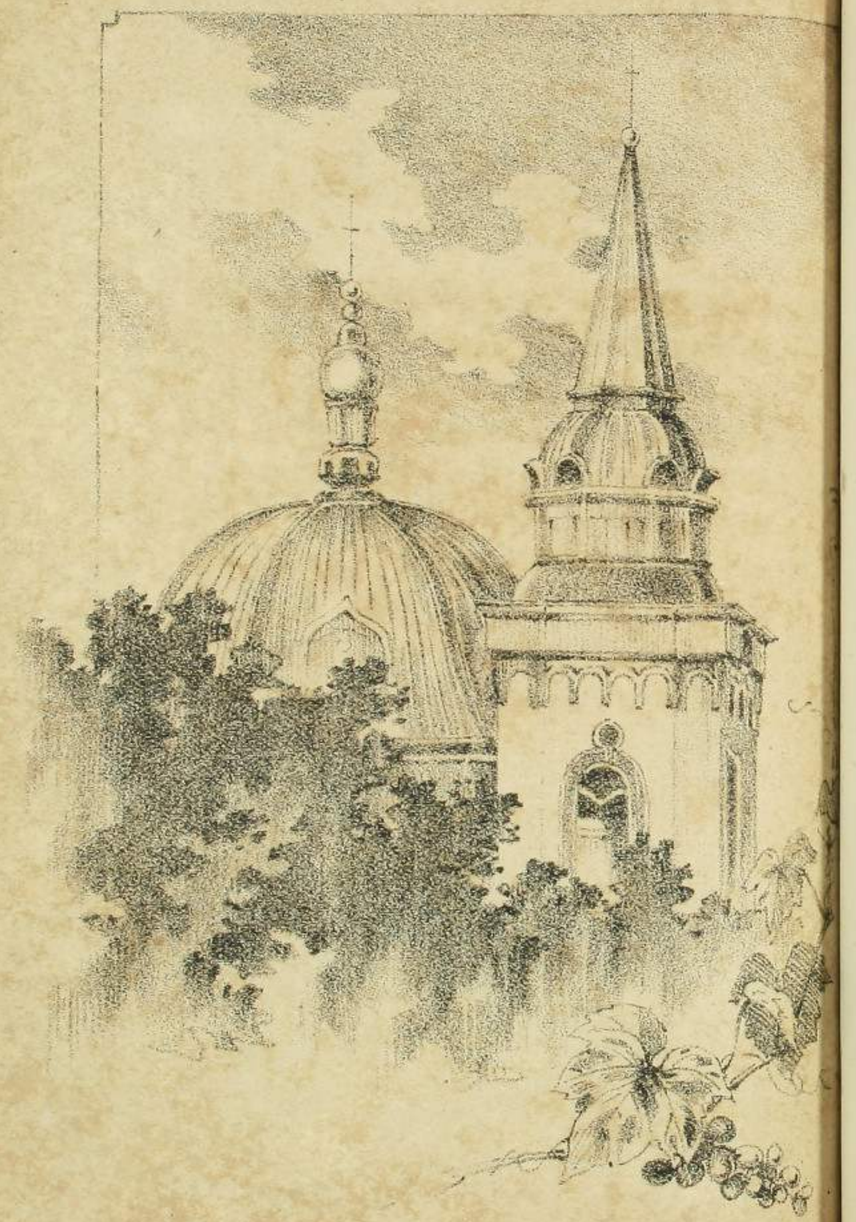
「止まり玉へわが友よ
見ねざるわざに見ゆる身を
まかせて果つる愚さよ
わかき生命を思へかし

「止まり玉へわが友よ

富を作りて家をたて
位をうけて死をかざり
この世の花をさかせかし

シナイの神の御手は
わかき神僕の指にふれ
ナザレの主の接吻は
わかき神僕の頰にあり

「心沈めてきゝねかし
汝が言の葉はいつはりぞ
生命のみちは十字架の
うへに流れし血汐なり



「わゝ或時はわがこゝろ
わかきいのちの一筋に
溪水のしたふ鹿のごとく
智識の水を追ひゆきて

「學びの庭の木の下に
言葉の露の香を仰き
書籍館に千萬卷の
書籍を求めてひろみにき

「深き緑を浮べたる
智識の淵のひろくとも
活ける泉をうちすてゝ
なぞか生命を求むべき

「わが身をされよ惡魔
生命の流うちすてゝ
智識の水にまよふなる
よわき心の我ならじ

「あゝ或時は我がこゝろ
この世の君のいつはりに
淺くもまよひくれ竹の
世にあらはるゝいさをしの

「濤路を破り風をわけ
昨はひがし今は西
港にならす滝笛のねと

さもいさましき大船や

「水をめぐらし樹をうゑて
珠を彫め花を刻り
にしきの幄、黄金の
燭てらす高樓を

「菫花さく川岸の
かりねの夢の手枕に
神のみむねを忘れつゝ
あはくうかべしともあり

「わが身を去れよまがつかみ
雄鹿の角のつかのまに

調むこの世のあた花の
匂をしたふ我ならじ

「あゝ天つ神！天つ神！
かぎり知られぬ御手をもて
みちなき野邊にさまよへる
われをみちびけ行く道に

「あゝ天つ神！天つ神！
かぎり知られぬ靈光にて
遠きやみぢにつかれたる
われをてらせよ安らかに」

「波路はるけき東の

はてに國せる日本の
青草人をイヽスヽの
めぐみの露にうるはせ

「シナイの神のみひかりを
富士の高根にきらめかし
遠き異國のくにたみに
まことの道を敎へかし」

二

雲にうびゆる圓頂の
上にきらめく十字架は
峻河の岡の中空に

神の御稜威を示すなり

深山の奥に身をかくし
きらめく星の夜れろく
みちなき山をふみあらし
崖にうろぶく獅子の身も

ナザレの主のみをしへを
民につたへて身を忘れ
敵をたふして義にいさむ
師父の勇氣にくらふれば

瀬をいのちなる小魚の身と
晴たる空に雲を呼び

やみをひろめて雨ふらす
龍のこゝろのうれなれや

誰か傾く月影の
ガラスの窓のまどれはひ
淡くてらすをうち看め
ろの故郷を慕はざる

誰か山路のむらさきの
葡萄の露のいろをみて
茂れる棚の葉の蔭に
ろの父母を懐はざる

誰か小鳥の聲をきゝ

たのしき歌を耳にして
牧場の暮の野がへりの
ろの朋友を忍ばざる

窓蓋洗ふ月の影
みぞりしたゝる葡萄葉の
蔭につらなるむらさきの
葡萄の露や鳥の歌

ふるさと遠き旅の身の
師父の心にうつれども
あゝろの弦のきれむまで
心の緒にひゝけども

人の姿を身にうけて
地にくだりしかの主の
旨にまかせる魂と身は
喜びて負ふ十字架や

春は函根の嶺をこゑ
西に教へつたかづら
まつはる罪をきよめむと
水の洗ひをはぢこせり

夏はこゑ行く白河の
關のかなたのみちのくの
つ波あらき荒濱の
磯邊に民をよびあつめ

秋は越路に錫杖を曳き
確氷の山にわけのぼり
民の心のかたくなを
紅葉の蔭にうちなげき

冬はさびし北陸や
河北の湖の芦鴨の
うきねに似たる人の世を
教へたまへり山蔭に

みどりの滴谷に落ち
流れて山をいづるごと
清き心の師父が胸

流れいづらむ説教

野邊ふる草の朝露に
わかき生命を得るごとく
伏屋のうちの賤夫は
師父の惠の露に泣き

靜にふれる春雨の
梢の翠を洗ふごと
師父の説教に宮人は
うの靈魂を洗ふなり

貧をあはれみ孤をめぐみて
寡の人を慰めて

神にさゝぐる祈りごと
あゝうるはしき師父がむね

言葉すくなきわが筆は
師父をほむべき力なし
弦ゆるみたるわが琴は
師父を歌はん術もなし

詩人のフランスの
天才の筆にせし
書のうちなるミリエルの
さまに似たりや師父が身は

駿河の岡の空中に

天の使のあつまりて
師父をまもりつ歌うたふ
師父見玉へやろのかげを

硯賦

光りもうすき我が部屋の
寫字臺の上の硯には
清き心の泉より
流れいでたる君が情
こもりやすらむ永久に
うすきちぎりと今ぞ知る
昔こひしきみちのくの

木の松山貝石の
硯を我に贈りしは
神の使の君が手よ

匠人の刀海を堀り
岡を造りて貝石は
玉の潤ひうるはしく
烏金をすれば我がこゝろ
あやしき樂をきける哉

硯の海は淺くとも
深きなさけの君が胸
香りゆかしき風吹かば
我が身の胸は荒磯の

潮たちのぼる海の岸

風やはらかき春の暮
櫻の花の一片の
硯の海にたゝよふは
我が身の上に似たるかな
薄き命を君や知る

土をやくてふ夏の日の
硯の海を乾すでとく
かわきてやまぬ我が胸に
玉の泉を注げかし
愛の渴きを君や知る

梢を落つる木々の葉の
雨にもまがふ秋の夜
硯にうつる月影に
君の姿もうつれかし
長き恨みを君や知る

葦の葉かれて雁金の
さびしく鳴ける冬の朝
情けにあつき君が呼吸
硯海の氷を解せかし
深き愁を君や知る

心つくしの貝石も
今はあだなる形見ぞと

朝の風になびきにし
煙の末のうらめしく
こはりて解けぬ夕雲や

心に燃ゆる焔もて
かの夕雲をとかすれば
あつき涙の玉霰
硯の海に流れ落ち
墨の色香も薄るなり

墨の色香はうすくとも
筆運びゆく玉章を
あつき涙と君知らば
安き心をわが魂に

再び返へし玉へかし

岸の柳の糸たれて
流れやさしき中津川
ろの源は北上の
遠き山路の谷の水
流れ〳〵て海にゆく

身もろれなれやあぢきなき
この世をうしと見てしより
かの青雲をうちすてゝ
残れる身と魂は
君の胸にぞ流れゆく

河水

人に知られぬ山陰の
岩間をいでゝ走りつゝ
たぎりてめぐる百千溪
すゑは荒野のはてにゆき
涼しく咲ける白百合の
ろの面影をうつしつゝ
あるは野草にたはむれて
深きみどりのいと廣く
くめどもつきぬ大河に

わが戀ふ人やたとふべき
はかなき影にまよひろめ
心の緒のみだれつゝ
涙ながるゝわが頰も
今は色なくなりにけり

河水清く流れゆき
若き心はうつれども
彼岸は遠しさゞなみや
渡るよしなき憂きれもひ
悲しいかなや我がこゝろ
溺れやすらん河水に

別離

再び遭はんろの日まで
何ぞか忘るゝとあらむ
君と別るゝ悲みは
心の絲のきるゝまで
強くうちけり我が胸を

しばしはゆるせ我が友よ
あさぎり深き松蔭の
露れく草のほとりにて
別れに灑ぐ涙ころ
汝にも我にも生命なれ

あゝ我が友よ汝が涙
いかなる時にぬぐふべき
あゝ我が胸のくるしみは
いかなる時にとくべきか
まためぐりあふろの日まで

別れてのぼる旅路には
たのしき事は夢にだも
獨り行く身は悲みの
重き軛にうちなやみ
夢想は君をめぐるべし

過きにし夢を説く勿れ

たのしきちぎり語りても
今はむなしき影ぞかし
流るゝ水に譬ふべき
つきぬ恨みの別れ路や
今松蔭をたちいでゝ
君に別るゝ我がこゝろ
朝に夕に汝をのみ
幸に不幸に汝をのみ
懐ひて日をも送るらむ

都を出づる歌

櫻の花の散りうめて

樹々に若葉のさしゝより
あやしく病める吾が心
身も日にまして凋みけり
夏の初の深みどり
つよき光にてらされて
木々の梢にかゞやけば
鳥は晴空に書きつゝ
秋の希望をこむるてふ
夏の自然をゆかしみて
うたひつはめつ興すれど
とくによしなき吾が怨

うらみや誰に寄せてまし
れのが果敢なき心より
身も世もすてゝ嘆きたる
緑の髪の君にかも

嗚呼愚なるわが心！
偽り多き世の中に
誰か誠の心もて
戀する人のあるべしや

をとこをみなの偽を
戀とや人の名づけゝむ
あやしく動く心根を
情と世には唱ふめり

されば千束の玉章も
皆いつはりの仇し言
やさしく震ふ唇も
唯一時のなさけのみ

膚は雪をあざむけど
心のいろは清からぬ
緑の髪は長けれど
縁みぢかきを誰か知る

妙なる文をつゞりなど
世をも動かす筆のあや
哀れにうたふ一節の

異國ぶりの歌の聲

やさしくたるゝ振袖を
風にまかせてうちふれば
きよき香の花の影
春にゑひたる心かも

あゝ筆のあや歌の聲
香の春にゑひはてゝ
心の泉わきかへり
あやなく君にろゝぎしが

今は空しきまぼろしの
追ふかげもなき夢の跡

やすき心を吾が身より
うばひし君のつれなさよ

嗚呼愚なる吾がこゝろ！
いつはり多き世の中に
誠の文のあるべしや
歌は言葉のかざりのみ

やさしくたるゝ振袖に
薄き情をつゝみつゝ
花のかをりの油にて
汚がれし心ぬぐはひつゝ
うはべをかざる優さ姿

風にとたへぬ糸柳の
水に臨める樣ありて
心づよきは女なり

學びの道を咀へかし
あしき學びの身にしみて
れのづからなる婦の道を
今の處女はうちすてぬ

嗚呼吾がこゝろもゆるなり
つめたき智惠の水さして
消さんとせしも幾ろたび
されどあやしき焔にて

大路をゆきて乙女子の
罪なき樣を看むれば
一度ありし彼の君の
昔の樣を懷ふかな
まばゆき衣、雪の膚
笑へる如き唇の
やさしき紅の色みれば
想にうかぶ夫の夕べ

嗚呼愚なる吾がこゝろ
あらゆるものを捨てよかし
世は僞の器にて
人は不實の型なるを

夏のあつさの増す如く
心の病日につのりなりにけり
今はわたへずなりにけり
なれし都をいざ去らむ

郷をいでしは廿年の
昔の夢となりにけり
あゝ彼時ば船人の
船よろはひて出るごと

行くての望多くして
わかき生命のたのしくも
盃うかべ友垣と
共にうたへり詩を

てゝろは遙か異へども
年月あまたすみなれし
都を去らんけふの日に
何ど一言のなからめや

歌

我歸らじな都には
幾多の月日へしかども
かへすすべなき吾が怨み
都はわれの敵なれや

學びのわざをさづけしは
都の恩と人は言へ
安き心をうばひたる

都はわれの仇なれや
したしき友とちぎりしは
花咲く春の夕なり
限りしられぬ悲みを
都の常と忍ぶかな

僞多き都人
神のいかりはわれらから
ゆめな忘れろわが友よ
海にもにたる長き恨を
怨は都にかへれども
かへる時なき草枕
東の關の雲を追ひ

西の海邊の波をみて

吾が放浪の一生は
雲路遠山あるはまた
愁煙肝を焦すなる
孤島のさまに嘆くらむ

さらば都よ吾が友よ
われは歸らじ都には
年あまたへん後までも
われは歸らじ都には

平業主に寄する歌

由來人生不幸多し。而して女子の不幸ふるは實は憐むべきかり。曩台の女子神學校の生徒業を卒へて世に出るに際し、予彼等の前途を想ひ、感慨のあまり此の一篇を賦して、女學生に寄せたり。

深き惠みの師に別れ
厚き情けの友垣に
袖をわかちて君は去る
うきとしらぬ花園を

庭の櫻の咲きみだれ
紅雲たなびく欄干や
綠したゝる葡萄葉の
蔭うるはしき夕暮や

あゝ一時の夢とすぎ
心くしたる文のみち
今日卒りてぞ君は去る
うきとしらぬ花園を

駿河の岡にひらきにし
學の舍のあけくれは
遠き昔にありしてふ
たのしき園にことならじ

學を卒へし喜びは
君がまとへる花衣の
ろの片袖につゝまれて
あふれ出でたる頰の微笑

さはいへ少時思ひ見よ
幾年月をすごしたる
たのしき園を今日いでゝ
何處へ君は行き玉ふ

縁のうすきわが身にも
君か行方を看むれば
胸は愁の雨雲や
なあざけりろわが涙

しばし止りきゝぬかし
うきとしらぬ花園を
今日出でゝ行く乙女子よ

調べつたなきわが歌を
心はうきに閉されて
山また山の旅衣
夫の峻嶺にわけのぼり
杖を停めて看むれば

山はけはしく水蒼く
荆棘路に横はり
風伯雨師は折々に
うき身をおろふ行路難

車を摧く大行の
路はけはしくありぬとも

舟覆す巫峽の
流れはいとゞ急しとて

何ぞ難からん人生の
いまだ知られぬ路をゆき
限りもあらぬ悲哀に
こゝろ傷るに比ぶれば

悲しいかなや君が身は
人の生の旅にいで
雨とふりくる禍を
今はのがるゝ術もなし

やさしき君が眼眸に

泪たゝふる有様は
雲間をもるゝ曉星か
草にやどれる朝の露

笑をふくめる唇は
香の高き薔薇の花
豐けき頰の櫻色
眉は翠の遠山や
罪なき胸の眞底より
いづる息にはやはらかき
春の風こゝろてもるなれ
冬の氷もとけぬらむ
つやうるはしき黑髪は
春まだ若き青柳の

風に洗はれ一入の
色をますにやたとへなむ

綿にも似たるやはらかき
君の両手やくれなゐの
爪ある君の両足や
優しく立てる有様は

天の使の雲をいで
この世に降りし姿あり
また譬ふれば玉樹の
風に臨むに似たるかな

いきいのちを譬ふれば

朱だあたらしき太陽の
暮には朝の霞を出づるごと
遠きたのしさよ

清きこゝろを譬ふれば
雲間をいづる宵月や
塵にはろまぬ清光の
ろの身をてらすうつくしさ

かくもやさしき乙女子を
この世の君は何と見む
かくもやさしき乙女子を
この世の君やけがさなむ

あゝ乙女子よ、乙女子よ
若きいのちのあさぼらけ
この世の塵と悲みに
ちかづくなかれ心して

さはいへ悲し君が身は
行かでやむべき人生の
悲み深き大海や
愁ひたへざる濤の音

心やさしき君なれば
かなしみ深き人生の
舟出に泣きて紅涙は
長き袂をうるはさむ

心やさしき君なれば
世の波風になやみては
能をたえたる捨小舟
行くべき島を失はむ

心やさしき君なれば
ながき年月人生の
あらき波路にたゝよへば
なげきに死にやし玉はむ

かゝる悲しき人生の
海はわれ等が自からの
つくり出しゝ境苦にて

逃かるゝかたし人の運
定まる運を逃がるゝは
たやすき業にあらずかし
されば われ等はもろともに
神にいのりてすごさまし

あゝ乙女子よ乙女子よ
汝がうるはしき心もて
天にゐませる父君に
安き心をいのれかし

限りしられぬ恵みもて
汝をいつくしみうだてたる

淋しき部屋になげくとき
の父母を失ひて

幾山河をへだつれど
世にむつまじき同胞に
永き別れとなりにける
報知を汝のきけるとき

梧竹はあをく紅の
薔薇の香のかんばしき
窓の下にて汝が夫の
深き愁を思ふとき

川添ひ柳かげさびて

闌ふ秋のこがらしに
汝が失ひし緑子の
ろの面影を懐ふとき

野邊も山邊もかれはてし
淋しき冬のまよなかに
重病の床にある
夫の枕のぬるゝとき

あゝ乙女子よ、乙女子よ
汝がうるはしき心もて
天にゐませる父君に
安きこのいのれかし

ふかき愁の身にふりて
あつき涙のいづるとき
心をやぶる悲みの
雲にろの身をつゝむとき

光をしたひ闇黒になき
身も魂もすつるとき
自由を望み罪惡の
軛すてんと思ふとき

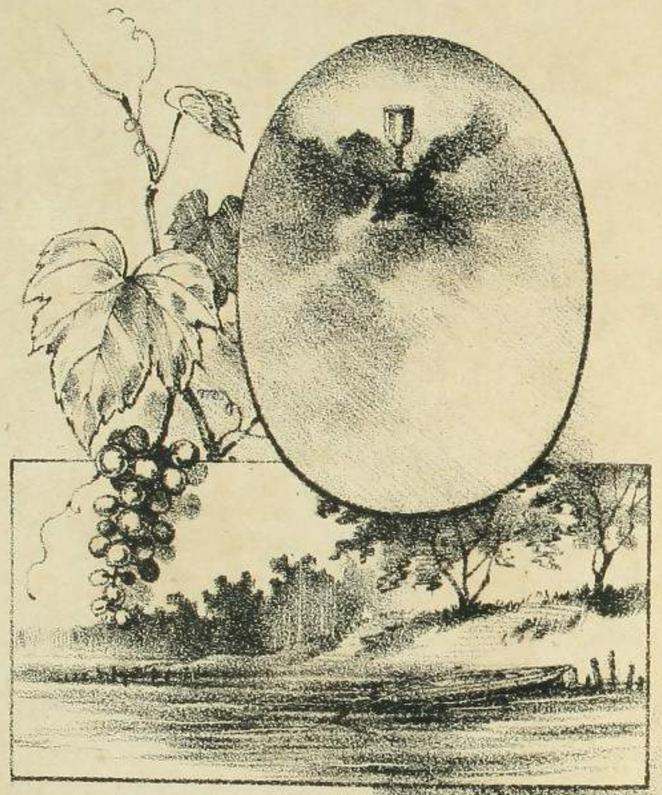
過ぎこし方の罪を悔い
ゆくての希望を願ふとき
この世のつとめなしはてゝ
來たらん御世にいたるとき

あゝ乙女子よ、乙女子よ
常にいのりて一時も
心にやむるとなかれ
神はまもれり君が身を

うきとしらぬ花園を
今日しもいでゝ君はゆく
調べつたなきわが歌も
あだになきゝろ我友よ

蕁麻の葉陰

山本[illegible]



神、大空を流るゝ雲の時さして黄さゝり時さして紫さゝり青さ
われ、さゝりあり紅ねさゝり黒さなるを見しこさゝりやあり
てしゝき空にうつりゆく雲を葡萄の葉かげにみどりの露のしたゝる秋の夕べゝゝりきほふざしこと

神、汝は常に悲み常に喜び常に怒り常に懼るゝにあらずや
われ、然りたさば彼の夕雲の黄に紫にみだるゝが如しゝ
神、さらばかぎりかくうつろふ雲のうちにいみじき星のひそめる
知れりやそはすべてのものゝうるほひふりいのちふりあるを
われ、吾れはいくたびか彼の光を眺めいくたびか彼の光をのぞみ
見たれどゝあまりにそのかゝやきのすがにして吾が姿を清
き泉にうつすにあらずや
汝の心にもそのうらめりきの光ありやもしみ空の星を光
よ汝の心のうちにもかすけくらしと言はざるべからず
ずしばしの光りたへざるものふりの姿の泉にうつるを尚ほ
汝はすみれの匂ひにたゝちに星の光りなあざやかなりとふ
もてたゝちに星なあふぎ見よ星よりほさばしかるゝ
げてしづかに暇をもつるなれまづ
霊水はいまし方青草の如くうるほさん

青梅の葉がくれにみのる頃、

ゐえふ

ぶだうの葉かげ

山本露葉

一

足は小草の露を踏み
眼は夕づゝを眺めたり
かの枯葦のなるごとく
唇もるゝ聲やなに

君はも誦すかから歌を
あまりに調のひくければ
きこゑやはする川浪の

岸邊にふるゝ音のみして

二

今よひ汀にまとひして
心なぐさに只みたり
かたりあふべく定めしは
夕づゝ見ゆる頃なりき

はや一つ星かゞやきて
河瀬に光りしづめつゝ
はや二つ星見えうめて
葉末の露にやどりつゝ

草葉草葉の草かげを
ねぼろにうつす三つ星も

すでに彼方にいでたれど
吾がまつ人は見えざりき

一

砂にしるしゝ友の名の
よせくる浪に洗はれて
深きよどみにながれしも
あゝ數ふればいくたび

舟子あまたゝびたちかへり
ゆるき流れに棹さして
舟やる歌を高らかに
歌ひ行きしもいくたび

利根の川面(づら)霧こめて
音のみ高しさゞれ浪
ゆきゝの小舟あとたゑて
歌もきこゑずなりにけり

二

見よ河隈(かは)の杉森の
はのかに水に影さすは
今し新ひ月のぼりけん
野邊の千草も色づきぬ

きけばあやしやものゝ音い
かのふくろふのものゝけか
すだまにれぢてから聲に

友をよぶにも似たりけり

君こゝろみに石とりて
音あるかたにうちて見よ
人まつ今のつれ〴〵に
こも折からの興なれや

一

つぶてなげうち草がくれ
行く手はるかにうかゞへど
音はいよ〳〵さやかにて
吾れ等のかたに近づきぬ

吾れあやまてり彼の友は

舟あやつりて來るらん
さらばあやしきもの音は
浪間にひゞく擢ならん

二

友來るらし耳なれし
口笛近く起りけり
共に手をとり月かげに
彼の姿を迎へんか

渚の葦に風たち
うつれる月はくだけたり
くだけし月はゆらめきて
はるかに遠くたゞよひぬ

一

小舟つなげよ柳かげ
ありしみぎりはうつろひて
水にちりうくひと本の
柳にとめよみなれ棹

君まつことのけうとさに
利根の川邊をいくかへり
ざねこざかしき野狐は
はやものろひぬ森かげに

夕べをつぐるむら鳥の
もろの翼はれさまりて

眠りをさろふぬか星は
見ようるはしくみちけるよ

かあをの水はあふれいで
ひゞきは高し夜の浪
わたるか鐘もわびしらに
さでうつ人のかげもなし

二

川邊のぶだう色づきて
葉がくれみのるひとふさよ
干ける胸にろゝぐべき
あまきしづくはしたゝれり

色紫の野ぶだうを
汝れがいとしの妹とみよ
ちぎらばいかにあまからん
葉かげに來りあふぎみよ

三

今よひぶだうの下かげに
星の光りを身にあびて
心々や歌誦して
うさなぐさめの物語

これ與あれぞ誰かまた
もたひの酒をくみかはし
樂しき春の夜ににたる

夢もとむるをいなさんや
年ごろひめしふるがめに
酒のかをりはあふれたり
わらうだつくれいざ今宵
むかしの吾れにかへらなん

あゝ誰か知る吾が靈に
わきたつ酒のうま味を
あゝ誰か知る吾が胸に
炎と燃ゆるかなしみを

炎をあげよ胸の火よ
潮はかへるわだつみに

れち行く夏の日の如く
空のはてまで燒きつくせ

空にきらめくぬか星よ
時世なしくかゞやかで
一度はれちてうつし世の
罪のむくろを燒きつくせ

歌なからめやきりぐす
か細き体に節づけて
野末に迷ふ小羊の
れうき歩みもとゞめしよ

三、うたふ

罪の盃
奇しく興ある
街にいでゝ
袖ゆきすりに
くみしより
ものぐるひ
市人を
目とむれば

老いは若きは
あやかしがたり
耳を掩へば
眼とづれば
醉ひしれて
くせがたり
目に近く
耳さとし

學びの園に
唱歌誦んずる
まだ香もなしと
はのかに匂ふ
花咲きて
乙女子の
思ひしに
罪の酒

ひじりを訪ふて
酒侑めんと
いかめしいかな
はやく盃

盃の
たちよれば
髮なでゝ
かたむけし

あゝ吾れのみに
ひとたび飲まば
ふたゝびすれば
あまきをしれば

あらざりき
心れぢ
こゝろ醉ひ
吾れとなる

光りをさくる
夕闇町の
壺をはりする

まが神は
木の蔭に
杓とりて

路ゆく人を　よびけるよ

かへり見がちに　行く人は
晴きをよしと　ひろやかに
盃うけて　ふくむとき
なはものはしき　れもひわり

玉はたちまち　くもりけり
あゝ誰ありて　くもりたる
心の玉を　つかのまに
もとのかたちに　かへすべき

器にもりし　眞清水に
墨のしづくを　れとすとき

黑きはちりて　ことゞく
墨の清水と　變るに似て

くもりし玉は　うちこぼち
さらにとぎ師に　ふれざれば
みどりもふかき　つや玉の
色彩あるひかり　放つべき

街の木蔭　往くなかれ
額蒼白う　髮みだれ
眼くぼみて　さゝやける
姿にれぢよ　まが神の
來り敎へよ　ぬかづきて

とぎ師に玉を　さゝげなん
とぎ師ゐまさば　はるけくも
雲のうちにも　わけいらん』

一、うたふ

うこに二つの　泉あり
一つはあまき　野澤水
一つはにがき　磯清水

野澤の水に　星やどり
磯の清水に　月やどり
ともにあふれて　流れいで
人のくめるに　まかせたり

磯の眞清水　音も昂く
あるときはまた　ますらをの
さつをひきなす　弓はづの
ともの響きに　まがひけり

野澤の泉　音もひくゝ
柱なき小琴の　絃きれて
空しくひゞく　空鳴りの
かすけき音に　かよふかな

小琴のしらべ　さやかにて
はづの響きは　みだれけり
みだれし音は　耳近く
さやけき聲は　耳遠し

野くれ山くれ　つかれはて
うゑたるかなや　旅び人の
小笠かざして　たゝずめば
なつかしきかな　水の音

音はたかくも　旅び人よ
磯の清水を　くむなかれ
かくるにやすき　月かげの
うかぶを見ずや　月の浮ぶを』

二、うたふ

まだいわけなき　草苅は
白き牡牛に　またがりて

桂の花を　かざしつゝ
吹くや手なれの　銀の笛

野川の水を　渉りては
今ひとたびと　吹きなせば
蛇は調べに　たどろきて
草むら深く　かくれけり

桂の香り　野にあふれ
うばら花咲く　花園に
妹脊手をとり　しめやかに
戀歌よむにも　似たりけり

酔ひたる如き　心地して

牡牛さながら　歩もたゆく
荻の下草　踏みてゆく
あゝかれの身ぞ　たのしけれ
牙かみならし　土をける
をゝしき獅子も　かの笛の
山をへだてゝ　さゆるとき
眼をとぢて　きゝすめり
童子のふゐを　きかんとて
夕ぐれひとり　野にゆけば
ひゞきはあらで　小萩原
牡牛の爪の　痕ぞ殘れる」

流星

ろは趣味多き戀ひかたり
かの七夕の夕ぐれ
雲うつり行く中空に
星の光りを見るに似て

星の光りにゆあみして
たくみの園に遊ばずは
などうるはしくしたはしき
戀のれもひに醉はるべき
空しきわざをすてしより

いくろのうれひ身をさりて
はれてものなき高み空
春の光りも眺めしよ

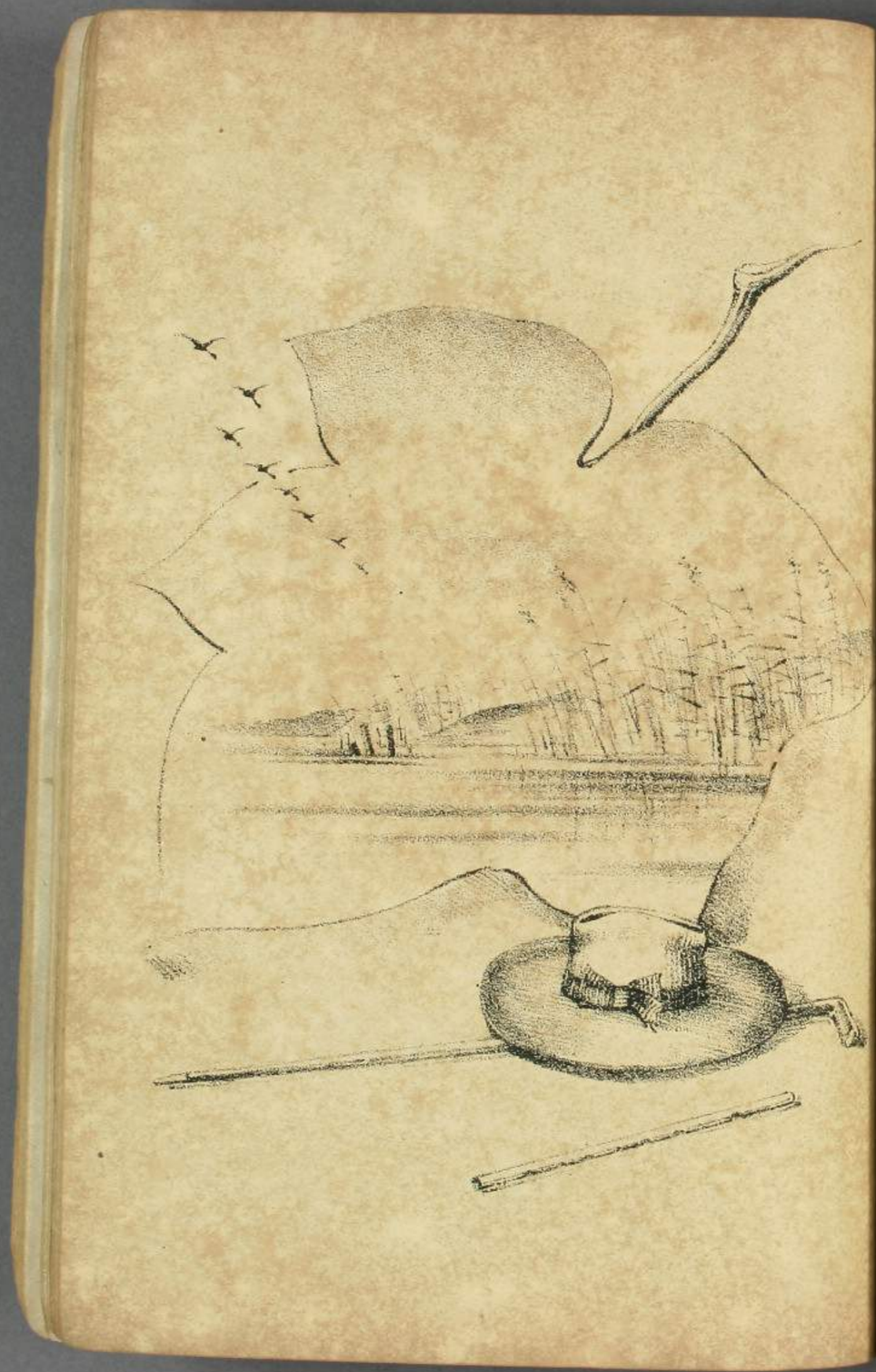
夕逍遙の小野川べ
木々の青葉の色ふかく
しづ枝したゝり地にれちて
匂ふみどりは白露か

干きにたへでろの露の
あまきしづくをくみしとき
さやげる星のたゞ一つ
青葉の森に流れしが

いづちれちけん深みどり
あふぐみ空に群星の
またゝくかげはしづかにて
ことにさやけき夕づゝ

さだめの神の乳房より
流るゝにがき酒に醉ひ
魔神吹きなす角笛の
みだるゝふしに耳しひて

身は秋の葉のうれなれを
夕べ流星見てしとき
わかき血汐のわきたちて
天のこんづのあふるごと



あゝかの星ぞ戀しけれ
星を思へば身はさらに
運命（さだめ）のしもとのがれいで
園にさまよふ心地すに

ゆるせ流星なを戀ふは
いのちを戀ふにひとしさに
なれ天蓆をもたらして
吾れいのちあり朝ぼらけ

吹笛餘韻

詩人

此の夕暮の靜けさに
吹けやひとふしほがらかに
彼のぶだう葉の蔭にして
乙女の歌をきく如く
なつかしきかなろのしらべ

友

二人して行く野のみちに
とびかふはなにきりぐす
木々の落葉の音たてゝ

風はむなしく吹きわたり
秋はわびしき眺めかな

詩人

しづかに歩め白露の
葉末にうさをかこつらん
高き音になくこはろぎは
みだるゝ露にれをろきて
まづひろみ音にうれふらん
胸にあふるゝ悲みを
せめては笛の音にこめて
君新しき聲をなせ
匂ひも深き橘の

花咲く森にたちよりて

友

さなり森かげたつねゆき
秋聲の賦をこゝろみん
よし拙くも吾がふしは
吾がまことよりはとばしる
たとはゞ天のまな井なり

詩人

高き調べのひとふしは
執着ふかきくちなはの
燃ゆる焔も消すといふ
君がいみじき調べには

藝術の神も舞ひでこん

友

あふけば木々の葉をもれて
星はみ空にかゞやけり
夜の香りは袖近く
花なつかしきれもひして
人の心を迷はしむ

詩人

流れも清き大川は
ふかきみどりをたゝへつゝ
ゆるやかに行く草がくれ
砕けてれつる月影は

二人の姿うつしけり

友

きけ秋の葉のさゝやきを
一葉の桐のしらべこそ
響きを傳ふ小琴なれ
一つの絃に聲あらば
よろづの絃に聲あらむ

桐の一葉の琴柱にふれて
あめとつちとの万象を
かすかにわたるひゞきあり
なゞかりの世の人の身に
悲き歌のなかるべき

詩人

吾れあまたゝび森にきて
落葉の音になれしかど
今宵の如き月の夜に
いとしづかなるさゝやきを
きゝし事とてあらざりき

友

秋たけゝらし花芒
葦より高く穂にいでゝ
悲しく人をいたましめ
風自から草を吹き
鳴は汀を離れけり

詩人

たゞひとふしの竹なれど
きれば七つの律呂をなす
悲みの曲樂の歌
いかれるときは笛の音の
律もみだれてきこえけり

小草かたしき笛とりて
思ひの程を吹きすませ
梢にかゝる新ひ月も
今し雲間にかくるらし
なれがたくみの妙技もて
しばしとゞめよ行く雲を

友

吾れに愁ひの心あり
笛もさびしき音やたてん
夜のまもりの大神よ
しばしはゆるせ森かげに
笛ふきすさぶうつし此の身を

蜑が子に寄する樂歌

うしほは黒く夜は暗く
めぐり一里の島山に
かの高潮のわきかへり
みだれ藻の葉の匂ふとき

あけの鴉のなくごとく
よみの界より聲をあげ
海草青き岩かげに
かれ蜑の子の産れにき

年の六とせは夢なれや
かの黒き双のまなざしに
うつるは碧き大海原
あるは友よぶ磯千鳥

朝いさましく舟浮けて
夕べ樂しく漕ぎ歸る
櫂の歌さへきゝなれて

れぼつかなげのひとふしや
空にひろめるぬか星の
天のやどりをたちいでゝ
人の世近く來るとき
碧も深き岩が根の
海藻のなかに身をよせて
聲もはがらに歌うたふ
かれいとけなき蜑が子の
稚なき歌を人や知る
春の光りののどかにて
霞みこめたる海原や

綾織る浪もしづかにて
鷗とぶなり二つ三つ
眼をきはめ眺むれば
はてしも知れぬ大空に
紅ゐ雲のたなびきて
とゆきかくゆく信天翁
たちまち浪にかくれては
鷗の夢をれどろかし
羽風も輕く身もかろく
松が枝近くとび來る
鳥のゆくへをのぞみゝて

しづ心なき眼にも
かゝやきの色あふれつゝ
ぶだうをてらす星のごと

よもぎの髪の肩越ひて
走れば なびくみどり毛や
とまれば ろよぐ蜑が子の
頬のあたりの紅ゐは

あゝ なにゝたとふべき
林檎をつゝむうす葉や
すかせ心見ゆるべにのくま
うの色香にぞたくらべん

夕日に似たる頬べにの
なにとてかくは色赤き
まだ戀知らぬ幼な子に
わかき血しほやかよひけん

春は濱邊に舟浮べ
日ねもすとるや磯の草
潮の音にれぞろきて
岩窟近く漕きくれば

わだのうこよりさす潮の
夕べの色となりはてゝ
夜のまもりの星一つ
はやも彼方に見ゐるめぬ

浪のよる寄るまかせては
玉藻の中に浴みして
ふかくぢしづむ海の底
またあらはるゝ浪のひま

さす手ひく手の勞るれば
磯の眞清水口つけて
追ふやさゝ蟹澤の蟹
ろの夏の日の面白や

潮にかをる秋草の
香をなつかしみわりたちて
汀づだひにとめ行けば

一本小百合花咲きぬ

花ある所にはひあり
韻あるべにみどりあり
みどりが中に赤きあり
ろの赤きをば思ふかな

沖の方より吾たてゝ
浪を寄せくる冬の日の
もしほの煙みだしつゝ
木枯近くせまるとき

聲やきこえん吾が父の
いさりの歌に耳とめて

磯山高くのぼりゆき
雪のゆきゝをうれふかな

市のひゞきを耳にして
ろのひと聲のはじめより
ぎえとき眼ひらめかす
都に遠き離れ島

めくり一里の島が根に
小暗き窟を家として
わが踏む土のほかにまた
國なしとこそ思ふなる

わゞが心をたとふれば

うしほに沈む眞珠や
かのわか星のひろやかに
きよき光りをうつすらん

星よみちびけ蜜が子を
ながの世のうちにとゞまなひて
やすき眠りを與へては
光りのかたにしるべせよ

かをれよ花よ蜜が子の
まくらべ近く香を送れ
春の心に咲きいでゝ
うまゐの床をなぐさめよ

音をなたてろ夕潮よ
樂しき夢やさめはてん
しづかに滿ちてとことはに
平和の樂のしらべせよ

湧きて流るゝ眞清水よ
盡くるときなくわきいでゝ
干ける蚕が唇に
なれなぐさめの香をうゝげ

風よしづまれとこしへに
星やかくれん花ちらん
汐やみだれん蚕が子の
胸や騷がん心せよ

歌よむわざぞ心えね
かれ蚕が子の心には
かのもちの夜に新潮の
れどるが如き聲あらん

哀歌

玉のれ指に臙脂ぬりて
かの夕空にとかすれば
夕べの雲の雨となり
風となる夜の騷がしや

君傾城と名によべど

幾山河を傾むくる
己が心のまことをば
あゝ誰ありて知りぬべき

楠槙姿なよゝかに
すろに金絲のぬひ模様
か黒き髪のみだれては
ばしまに凭る夕間暮

彩なる雲に日は沒りて
あからひく日の空模様
夕陽のたつかたを眺めては
ひとり淋しき吾が心

誰が手すさびのあとなれや
海の八百潮まきあげて
たゝなはる雲よびあつめ
天にのぼらん龍のさま

たゞ一茎の筆よりぞ
生れいでにし繪畫なれど
双の眼のうるみには
限り知られぬ怨恨あり

誰か知るらん畫工の
心のうちの悲哀を
利鎌に似たる両牙に
世をくつがへすれもひあり

包むにあまる情、熱をば
炎となして吐きなせど
悲いかなやうつし繪の
聲もなくまた色彩もなし

よし墨の香はうすくとも
吾れ裲襠をまたふとき
よし綾衣はうすくとも
吾れろのきぬを纏ふとき

畫工が筆をしのびみて
朝の潮の來るごとく
悲き幽懷わきいでゝ

淋しくなりぬ吾が心

泪や雲となりぬらん
血や八百潮となりぬらん
心づくしの龍の繪を
あゝ誰ありて知りぬべき

薫りもたかき名木を
かのうちかけにたきしめて
泪にひぢし畫工が
あつき情けに抱かれん

裳ひるがへすたびごとに
伽羅の薫りのときめきて

天津乙女の天香を
ふりうゝぎけん匂ひあり

足をあぐれば清香の
所せきまでみちわたり
しづ枝がくれになく鳥も
香をたづねてかとび來る

霞みのとばりうちたれて
ふかくひろめる天津神
手なれの小琴妙やかに
搔きならしては人の世に
夕來にけりと知らしつゝ

天のつかひを神つどひ
むらごの雲を曳きなせば
ねぐらに歸る鳥の聲

晝のうしほは海にゆき
夜のうしほは河に入る
夕べしづかにたゞひとり
柱なき古琴の龍腹に

身をうちよせてた指もて
十三絃をまさくれば
伽羅のかをりの身にしみて
いぶかしきかな吾が心

彈く人もなき琴なれど
何かあやしき音にいでゝ
或は昂くまたひくゝ
空鳴の音にあらじかし

板屋を走る霰のごと
にはかに風にみだれては
もとの時雨にたちかへり
琴の調べはしづかなり

こはいぶかしとしりぞきて
龍尾のあたり見まもれば
あやしや絃はきれはてゝ
尺にも足らぬ蛇の

眞紅の炎ひらめかし
斷れたる絃にすがりつゝ
此方をきつとにらまへる
數も九つ十あまり

あゝ執着よ去れよかし
去れよかしとは願へども
尙ほさりがたき執着は
松にまつらふ蔦かつら

あゝ己が身は松にして
吾が執着は蔦なれや
松たゝざれば蔦かつら

たゐんすべたになかりけり

あゝ己が身は松にして
吾が執着は蔦なれや
蔦はいよ〳〵まつはりて
松はいよ〳〵やするなり

理由なくきれし琴の緒に
執着深き蛇のまつはる見れば吾が心
あつき炎ともゐいでゝ
もの狂ほしのありさまや
心の魂は幻となり

執着心は火となりて
つばは干きて舌はつり

うつし世の罪數へんと
まぶたをとぢてやゝしばし
古琴の前にうちふせば
何かさゝやく耳近く

まづさかづきをふくむべし
うまざけくみてはるのよの
たゐなるがくにゐひふせよ
こひはわかきがいのちなり

わかきいのちのあさぼらけ

こひのたぶねに　さはさして
さけのいづみに　うかびなば
まだうらわかき　にひぼしの

いづみのろこに　やぞうては
ひとのよにみぬ　かゞやきを
わかきすがたに　うつすべし
まづろのほしを　かぞへみよ

眼をあげて見いだせば
ありしさゝやき聲もなく
吹くは春風やはいだに
かをるは伽羅のとめがをり

こも執着のまぼろしか
吾れ執着に生れいで
執着の世に人となり
執着の世に了るとは

こも興ありてれもしろや
あゝよしさらば我が龍よ
あくまで牙をみがくべし
とぎて甲斐なき世なりとも

あゝよしさらば蛇よ
あくまで琴にまつはれよ
なれ小蛇の身なりとも
やがて蒼龍となりぬらん

桂を折りて玉をうち
炎の中に投ずれば
うらみは多し『明暗』の
二字明かに讀れける

元旦の歌

八重の汐路の末かけて
わきたちかへる新潮に
とはの響きのしづかにて
のりてぞ來ます春の神
紅ふかき彩雲の
五百重の浪に照り映ゑて

光りをしめす新ひ年の
旦の空のかゞやきや
神のつかひのむら鶏
東の天の戸をいでゝ
はがら〳〵と啼きめぐり
天かけり行く聲きけば
ねぐらをよろにあし田鶴や
春告鳥のいとはやも
すゞ吾が春をみよやとて
神世の風にうち羽ぶき
もゝの囀りもゝ羽搔

雲井にかよふ金鈴の
節も面白う啼きかはす
ゆたけき春の朝ぼらけ

まだうら若き佐保姫の
朝のよろはひうるはしく
たけにも餘る綠髮を
吹く初東風になびかせて

いたゞく金の冠や
ま玉しら玉日もたゆく
かざるや玉のちよろづに
とはの平和の色みせて

はだへをつゝむうす衣の
ま白き裳をひるがへし
仰ぎ見すればいや高き
光りの中にぞあらはるゝ

海の八百潮百々千潮
自からなる音にいでゝ
調和の樂をかなでつゝ
吾が佐保姫をたゝふかな

ゑみかたむけて佐保姫の
かたへに抱く四つの緒に
かひなさしのべ撥とりて
いみしき調をひきなせば

琵琶の調べのさゑわたり
あたりしづけき神の曲
空ゆく雲もとゞまりて
とびかふ田鶴に聲もなし

一つの絃を彈くときは
のゞみの光りきらめきて
二つの絃を彈くときは
若き希望のあふれつゝ

三つの絃をかきなせば
平和の心ときめきて
四絃一時に彈ずれば

とはの調和の流れ漂る

調べもくしき撥音や
世はとこしへにとことはに
吾が佐保姫の樂の音に
限りもしらぬ醉へるかな

撥とるかひなさしかざし
二たび三たびうちふれば
むらごの雲のひまとめて
花ふりろゝぐ白紅蓮

白蓮紅蓮ちりゆきて
花のかをりのみちわたり

新しき年のこの朝け
美妙の宇宙の律のきこゆる

玉椿

兒玉花外が新婚を祝するの歌

ふかくひめたる　ながことの
ひとつのいとを　やさしくも
かなでうめにし　このゆふべ
うれしからずや　きみがみは
ぢよりことぢと　かけわたす
しらべのいとに　ながゆびの

ふれけんときぞ　いかならん
れどりやしけん　ながこゝろ
まづこゝろむる　ひとふしに
とはのへいわの　ねをこめて
きこゑやすらん　あめにまで
うたふこゑころ　ふるえしか
あめとつちとの　ことゞにに
うのとこしへの　きはみまで
ひゞけよところ　うたひます
かみのみまへに　ひれふして
てうわのがくに　みゝとめよ

いろころなけれ　かもなけれ
めにはみえねど　こゝろには
ひゞきやすらん　ひろやかに

かみのしらべに　ながきよくを
あはせてうたへ　ひとみなの
むねにひめたる　エレジーも
たのしきこゑと　きてえてん

くみかはしたる　さかづきに
きみくれなゐの　くちつけて
ろのひとつきを　ふくむとき
わかきれもひの　わきやせん

はゐのさかづき　あさくとも
ろゝぐさけだに　あまかちば
いつしかさけの　かにしみて
ゑひころすらめ　うたあらめ

ゐにしのいとゝ　なによべど
かたくぞむすぶ　くみいとや
かひなにかけて　ちよかけて
かみのさかきの　ぬさとせよ

戀

せゞらぎ走る若鮎の
まだ戀しらぬ身なれども

清きに水のすみゆかば
やどりもとむる心あり

夏の日ざかり山行かば
小百合花咲く岩かげに
脚絆ひもときたちよりて
清水掬ばんれもひあり

紅ゐあせし唇に
かの花の香をうつしては
甘きにうゆる吾が胸に
露をろゝがんねがひあり

あら野淋しく日は暮れて

木枯いたくすさむとき
よしや光は遠くとも
灯のぞまん風情あり

紅涙たゝへて乙女子の
高きみ空の月影を
ひとり眺めてわぶるとき
誰かは戀をしらざらん

猶太の野なるベツレヘムに
かゞやく星の光りみて
遠きに來る人々の
心に戀はなからずや

うゆるにあらず吾が心
かはくにあらず吾が心
あゝ〳〵戀といはゞいへ
人には告げじまことをば

夢

ふるき夢路のあとゝめて
うのいにしへに分け入れば
なぐさめもなきうきたもひ
さめての今のねがひにい
新しき夢ぞのゞみなれ
わがまが神は髪をひき

夢みるなかれ若者よ
にがきこの世の盃に
うつれるなれの姿みて
からき遊宴をこゝろみよ
いみじき聖人手をとりて
みよや汝が花園にあり
なれが姿を蝶と化し
かの花園の露にあけ
露はいましが生命なり
ひとりふたゝび指さして
みよやなが星空にあり
時き此の世の夢路には

かの光りころたゞならぬ
かゞやく星に額づけよ

吾れ人の身の悲さは
いばらの露に酔ひふして
とげある花の香をかぎぬ
嵐の夜半に彼の星を
もとめんとしてあふぎ見ぬ

こも夢の間のねがひかや
土よりいでゝ土にゆく
うつし此の世の手枕に
かをるは何か花かつら
つかの間ならばうせよかし

友に別るゝとて

うれひも捨てよ名もすてよ
泣きて榮えあるものならば
蝶花鳥と身をなして
ものしづかなる春の日の
霞の中になきねかし
あかぬ快樂に酔ひねかし

永き春日をくすしくも
ひゝみがちなる君が身は
大理石に彫られし詩人の
聲なきがごとひゝやかに
欄間に彫れる花鳥の

しづかなるごとしめやかに
何故うち慄ふ君が額
夕べの空に佐保姫の
赤裳を曳ける虹のごと
ひとすじ赤き君が頰
すこしわなゝく君が手や
うるめる君が眼には
限りしられぬうらみあり
たゝふるゑみの面わには
さゞれ浪よるみづうみの
きよき眞玉もやどるべし
泣くなられふなな君が身は

深くもひろむしら珠の
光り得んとはねがはずや
まづ酌みたまへ一杯の
濁れる酒の壺かみて
奇しき薫りのみちわたる
春の心にいだかれて
妙なる律の歌もきけ
やさしき花の香もかげよ
一葉の舟に棹さして
浮みいでにしわだつみや
過ぎこしかたを眺むれば
世は春の風秋の雨

行く手の雲をとめ行けば
棚引きわたる七重雲

ま袖にかをる白蓮華
ろの花片の一つにも
自然の神のたくみあり
ひろかに思へ汝が神の
深きみむねを味はひて
まづ一杯をふくむべし

かの万葉の旅人の
欲せし酒の歌をきけ
一杯乃濁酒乎験無物乎不念者

酌みかはしつゝ今更に
春の歌をもうたへかし

にがき此の世の酒よりは
天のこんづのうま酒に
心のうしはうちろゝぎ
いざ二人してしめやかに
語りあかさんこの夕べ
ねばしま近く花もよし

夕づゝ

夕べの空をたちいでゝ
小草の露にやどらんと

まづひろやかに夕づゝの
雲のとばりをかゝげては
うすき光りをもらしつゝ
はるかなる野を眺むれば
露はれきたりしたゝかに

あな嬉しやとさゝやきて
しづかに身をばあらはしつ
今宵も來ぬとかゞやけば
うれはしげなる白露の
さびしき笑みをたゝえつゝ
近くきませと言ふがごと
覺束なげにきらめきぬ

とても短かきわにしなり
たゞ束の間のちぎりさへ
風や來ると思はれて
やすけかるべき時もなし
吾れ露の身の果敢なさは
例へんものもなかりけり

さな悲みろ吾れをても
うきにはもれぬわりなさよ
彼の夕月の東に
かゞやきいでんときころは
吾れの命のかきりなり
光りもなくてたゞひとり
雲のかなたにひろむべし

葉末は吾れのよすがにて
吾れは螢のよすがなり
君は吾れ等の光りにて
光りは吾れのいのちなり

吾れ光りある身なれども
君なきときは何かせん
雲井を吾れの宿とせば
君は吾等のかりの宿
やがて秋風吹きゝなば
ともにくだくる運命なり

悲きことの數々を

語るをやめてしばしだに
君は吾れ等に身をよせて
吾れ君ん身にみをよせて
樂しき笑みを與へよや
月のいでざるうちに
風の吹きこぬうちに

荒磯

さびしく暮るゝ冬の日の
海の彼方にいりはてゝ
光りもうすき夕月の
磯邊の松にかゝるとき

聲ゞ悲き水鳥の
汀を洗ふゆふ波に
力なき羽をうちふるひ
折々ひくゝとべるとき

きらめく星を數へつゝ
浪の花ちる岩のへに
吾れたゞひとり哀にも
悲き歌をたもふかな

身はうつし世の吾れなれど
心はきよきわだつみの
まさごの底にひろむなり

浮べる雲と身をなして
北より風の吹くときは
南の雲に身をよせて
春花鳥のこゑにゑひ
西より風の吹くときは
東の空にうかべども
たゆることなき悲みは
心のうこにひろむなり

なに思へばか悲みの
心の琴の糸の緒の
はかなくきれし夕べより
心の花のかをりさへ
空しくなりしうたてさよ

露にもにたる己が身の
きゑなんことを思へども
せめてつれなき人の世を
のがれんところ願へども

泪にもろきうた人の
心にひろむ琴の音は
あしたの空のあか星の
さやけき調べと異らねど
ゐらむよしなき世の人の
耳には夢ときこゑてし

葉ずゑにむすぶ白露の
あはれひと夜の程だにも

樂しき夢はあるものを
うきこと多き吾が世かな

いさりの火影かず消ゑて
しづかに更くる冬の夜の
荒磯の岩にたゞひとり
かく思ひつゝ吾れ居れば

なくむら千鳥聲遠く
ろこひも知れぬわだつみに
潮のひゞきとゞろきて
磯辺の松のにひ月に
うすき雲ころかゝりけれ

あるとき

白日の夢はむなしくて
身よさちうすき夕ぐれ
神にいのりをさゝぐとき
いのちにかへれ若きいのちに

人の力のよわくして
吾が世の菫花しばみ
かの世に菫かをるとき
いのちにかへれ若きいのちに

れなじいのちの朝ぼらけ

うたもうたはでたゞひとり
消ゆゆく星を數ふとき
いのちにかへれ若きいのちに

すくひの歌の譜ゝふりて
神のつかひのあたらしき
ひゞきもたらし來るとき
かへれいのちに若きいのちに

小琴なげうち鐃鈸を
耳もしひよとならすとき
さだめよいかにゑむらんか
かへれいのちに若きいのちに

あゝ人の身につばさなく
あゝ花鳥にこゝろなき
たくみのすべを思ふとき
かへれいのちに若きいのちに。

鷄の歌

黎明、空はしづかにて
神の使ひの天の子が
「さめよ」と小琴響けつゝ
慰籍の譜を歌ふとき
暗と明のなかとめて
緑の雲は流れけり

星かげ追ふて博士等が
うぶ子を見しもこの時か
蹶爪ろばだてあか星を
澄める眼にのぞみ見て
「さめよ」と叫ぶ鷄の
姿はいともたけかりき
雄鷄は雲をあふぎたり
牝鷄は葉蔭かくれたり
いづれ心はいさましく
もろ聲高し朝ぼらけ
あゝ輝ける眼もて

み空のれちを眺むるは
ひろめる星をよばんとか
天のさとしを得んためか

すゞけくきよき聲音ころ
なれが胸よりあふるなれ
旦の空にうまれずば
などかくたかく叫び得ん

曙、ねぐらたちいでゝ
彼の高丘に駈けのぼり
まづしのゝめを告ぐるとき
鷄冠は紅し露白し

夕暮園に餌をもとめ
忍び音になく雛鷄の
遲き歩みを認むとき
わゝ夫鷄の戀やなに

勁き翼に風をうち
さだめの魔神來るとき
牝鷄雛鷄をよびつれて
木蔭をいでゝをたけべよ

さらば吾が世の鷄を
右手にさゝげまが神の
ゆくへやいづこ雲幾重
うの白雲に放ちてを見ん

慰籍

蛇の鎌首うちくだかずは
なとで牝鳩の眠られ得べき
すだまのろひの聲聞ねずば
吾が世の夢路もやすかるべきに
迷へるよびとを迷はぬ界に
みちびくみ光見よ空の星
なやみと懼れにわなゝく子等に
匂ひは深し見よ野のうばら
醜き小蛇もいちごに醉はん

ねたみの眼のかゞやきうすく
ろねみのほのほも燃ねざる時は
うらみはあらじわゝ吾が鳩よ
葡萄の乳房流るゝしづく
つきぬいのちの水くみわけて
さとしの響を小琴につたへ
うたへ詩人なぐさめの曲
うれひと嘆きはたえずもあれや
シャロンの野花はとこ世の香
つかれと泪はたえずもあれや
詩人の調べはとこ世の慰籍

風月万象をはり

明治三十二年六月十五日印刷
明治三十二年六月十五日發行

定價金卅五錢

著者　兒玉花外
　　山田枯柳
　　東京市神田區錦町一丁目八番地
　　山本露葉
　　東京市神田區錦町一丁目八番地

發行者　大月隆
　　東京市神田區三河町三丁目九番地

印刷者　堀越嘉一郎
　　東京市神田區三河町三丁目九番地

印刷所　堀越活版所

版權所有

發兌元　東京市神田區錦町一丁目八番地　文學同志會

●文學同志會出版書籍目錄●

人間學

定價二十錢
郵税四錢

世には百科の學藝に長するもの多し然し人間學を脩めたるもの少し凡ての學藝は人間の爲に設けたるものなれば人間の成立目的事情及び如何にして完全なる人間の眞價を保つへきかを研究しつゝ脩めざるべからす若し然らざれば己が習ひ得たる學科の爲に人間は擒にせらるゝに至る本書は此社會の凹所を微か補んが爲に出でたり

美妙

定價二十錢
郵税二錢

春は花夏は螢秋の虫の聲冬の雪是等を始めとして人生の美貌鳥獸の艶ある事及び音樂より來る美如何に人生に快樂を與ふる賜なるか本書を繙くときは幽谷の鰐魚又飛立の妙美あり

文學の調和

定價二十五錢
郵税四錢

國異れば各々異りたる所の事情あり異る事情より各々殊別の文學を生む是れ一般の通理なり然し深く探究し來れば皆一に歸するものなり本書は各國文學の異る處を示し長短の意見を示し如何にして其調和均一の點に達すべきかを詳論せり

人生の目的

定價二十五錢
郵税四錢

●第一章緒論●第二章飲食主義●第三章勤勞主義●第四章競爭主義●第五章知識主義●第六章良心主義●第七章忠孝主義●第八章幸福釋義●第九章自愛主義●第十章他愛主義●第十一章兼愛主義●第十二章保存主義●第十三章飲食主義批評●第十四章勤勞主義批評●第十五章競爭主義批評●第十六章知識主義批評●第十七章良心主義批評●第十八章忠孝主義批評●第十九章自愛主義批評●第二十章愛他主義批評●第二十一章兼愛主義批評●第二十二章保存主義批評●第二十三章結論

人生の老旅

定價二十錢
郵税四錢

世に不幸の人多しと雖も己のが涙の洩し場なき人ほど苦痛の人はあらざるべし人生の老旅は是等の人の情友となり人なき處に於て深く兄姉の同情を表し其煩悶を慰むべし本書は人生の初旅の後篇なり初旅を讀む人は必す後篇を讀まざるべからず

婦人實務錄

定價十六錢
郵税二錢

此書は議論にあらず婦人の實際每日心得ざるを得ざる教訓心得方針を信切に說き苟も婦人として心得ざるを得ざる案內書也

人生の初旅

定價二十錢
郵税四錢

人の一生中には如何なる事が起るか如何に歩まざる可からざるか如何にせば立身すべきか如何なる人が失敗せしか本書は未聞快絶の實行録なり詩文あり散文あり小説あり議論あり先づ一生涯の漫録と思ふて可なり

家の寶全

定價三十錢
郵税六錢

本書は文學會の方針とする家制部發表の書にして各專門大家の家制意見及び家に起る萬般の事業方法を敎へ其項目にても五百有餘あり廿八年初版を起し今廿三版を重ね部數二十七萬部を出せる書なり手に取りて其價額を知れ始は二冊なりしが今は合本なり

馬琴妙文集

定價二十錢
郵税四錢

詩文散文序文末文碑文箴文戯曲坐右銘等馬琴全著述中の粹を集めたるものなり

實業の寶

定價二十錢
郵税二錢

此書は家の寶の兄弟となり得べき書にして家の寶は家の内の事に係り實業の寶は家の外の事に系る恰も車の兩輪の如し書を好むものゝ好侶伴たり

立身事蹟

定價二十錢
郵税四錢

世には失策者を以て充たせり失策せぬ先に失策に陷らざる方法を講ずるは立身の急務なるべく古今の聖賢と坐右に立談し彼等が失策と成効の事蹟を尋ぬ本書を友とするもの立身せざらんと欲するも豈得べけんや

山高水長

定價二十錢
郵税四錢

語らんと欲する事を語らずして人に知らしめ言はんと欲する事を口に明かに言はずして其言聲の美を知らしむ是れ新体詩の殊色なりとす坐ながら天地の快美を味はんと欲するものは山高水長の傍に來れ

傑作文粹

斷巖絕壁

定價三拾錢
郵稅四錢

文天祥正氣の歌を始めとして和漢の文粹を集めたるもの今回本會に於て出版せり盛夏緑陰の下本書を繙かは心神自ら清涼に沐するの感あらん

人生の氣力

定價廿五錢
郵稅四錢

舟舶波を犯して走るは蒸力の勢力あるを以てなり社會の迫害を排して身の安全を圖らんとせは須らく呑海の氣力は養はざるべからず本書は即ち吾人の蒸氣力也

吾人之生活

定價廿五錢
郵稅四錢

本書は文明の生活なり內地雜居後の生活なり日本人として文明的社交を知らんと欲せは本書の他に其友なし

文學同志會圖書賣捌所

大賣捌所

大坂備後町四丁目　盛文館
東京神田區雉子町　山本鐐藏
東京京橋區弓町　松村孫七

特約大賣捌所

鹿島	吉田幸兵衛	長崎	安中半三郎
久留米	菊竹書店	大分	甲斐治平
博多	森岡書店	熊本	中山知新堂
熊本	芹川書店	佐賀	河內庄助
熊本	大坪万六	馬關	上山書店

松山　向井藏次郎　高松龜友堂
丸龜　壇田書店　德山維新堂
廣島　清水庫三郎　岡山竹內彌三郎
岡山　山本金正堂　姬路木村治作
神戸　未定　大津古川伊助
京都　河合文港堂　津別所東四郎
濱松　谷島屋　掛川三原屋
靜岡　內田仙吉　沼津文林堂
名古屋　川瀨代助　名古屋三輪文治郎
仝　三輪伊六　仝耐成堂
仝　永東書店　豊橋不定
岡崎　伊藤文司　弘前今泉書店
水戸　市毛淺太郎　仙臺有千閣

木文書店　一ノ關文港堂
盛岡鶴鳴閣　青森鎌田政憲
福島鈴木万助　須賀川寶來屋
米澤素月晨平　白川奥村書店
小諸廣文堂　長野西澤喜太郎
新潟櫻井產作　仝島津協和堂
福井日新館　德島黑崎書店
高岡學海堂　千葉多田屋書店
高田高橋書店　長岡覺張治平
水原西村六平　三條樋口屋
富山小林清重堂　金澤宇都宮源平
高知開成舍　高知坂井万吉
福井日新館　新發田万松堂

和歌山　津田源兵衛

賣捌所

長崎治郎●開文舍●眞海書店●田中書店●吉田朔七●木田書店●矢內書店●藥師寺宇一郎●福井書店●熊谷久榮堂●吉岡支店●界今井書店●本多勝次郎●便利堂●清玉堂●安屋勝治郎●石田書店●文海堂●高須廣司●萬屋望月書店●平澤潤助●品川太右衛門●小杉久次郎●川又銀藏●寺田清兵衛●伊沼彌助●高木市兵衛●近江屋書店●清光堂●丁子屋與七●內山湊三郎●內田濱吉●田邊忠平●成見清兵衛●佐政商店●伊勢安●佐藤養治●便益堂●東北堂●伊吉商店●文江堂●煥乎堂●文華堂●伊藤書店●杉浦書店●島津協和堂●竹內三郎治●室書店●目黑十郎●萬松堂●野島半七●漸進堂●博向堂●上野屋●佐久間文林堂●立眞社●兒玉書店●三木文明堂●原田治介●東北堂●其他全國各書店

昭和九年
三月廿六日購求

「玉篇」
[illegible]